

水の文化

特集

琵琶湖と生きる

水の文化 Oct 2023 No.

75

作家
姫野カオルコ

外国なのに滋賀県

小学校に入ったばかりか、すこし前か。夕方に、父親を訪ねて客があった。

「今日はマイアミに行つて来ましたんや」

父親よりはずっと若い男性客が、応接室でそう言うのが、開けた窓から、ベランダで犬と遊んでいた私に聞こえた。

父親は気難しい人であった。マイアミに行ったという客人に対しても批判した。その重苦しく不愉快げな声は、だが、私にはきわめて日常だった。

そんなことより、私を困惑させたのは客人の発言である。マイアミ？ 外国ではないの

か？ このお客さんは、外国に行っていたのに、夕方にはもう滋賀県にいるのか？ なぜ？

琵琶湖国定公園の一部の浜に、マイアミというアメリカの湾岸都市名を借りて冠したなどということは、六歳かそこらの子供には理解できようはずがない。

父親の声が不愉快になつたのは、おそらく、この拝借ネーミングについては想像できる。今となつては想像できる。

また、「滋賀県のマイアミ」の絶景が撮られた現在のウェブサイトになどの画像を見れば、1960年代はじめに、アメリカの土地の名前を借りたかった

ひとしづく

日本人の気持ちも想像できる。大人になってからならわかるが、その時には、わけがわからなかった。

さて、この「マイアミからの客人」は晴天のマイアミ浜のよう
に明朗な人であった。

このあとも、たびたび我が家を訪れた。明朗なだけでなく、他人に対してこまやかな配慮をする人で、気難しい父を、彼だけがリラックスさせることができた。

かかるほどに、小学生最後の夏休みを迎え、このマイアミ氏は、父と私を、標高の高い永源寺町へ、自分の車で連れて行ってくれた。

おりしも大阪万博のころで、永源寺町としては名刹へのお参りだけでなく、レジャー面でも人を呼ぼうとしたのだろうか、「神崎川ヒュッテ」という名の場所ができたというので、釣り竿や缶詰や飯盒や米を車のトランクに積み、マイアミ氏は、奥さんと赤ちゃんとが乗る車に、われわれ父子も乗せて、にぎやかに向かったのだった。

「ヒュッテ」と名につくとおり、到着した山の中そこは、三角屋根の、三畳ほどのプレハブの

小屋が、林の中に三つほど点在し、煮炊きのできる台所のよう
な建物と共同トイレのある一画であった。

現在は「永源寺キャンプ場」という名前になり、雰囲気もがらりとかわっているようであるが、当時は、しかも小6の目には、メルヘンチックな異空間に映った。なんといっても、川の水のきれいなこといったら！
田舎町育ちの子供であるのに、そんな子供もびっくりして、目を見張るほど澄んでいる。

はだしになって、川の中に入れば、身が清められるように冷たい。

マイアミ氏は上手に鮎を釣り、竹にさして川べりで焼き、父親は飯盒で米を炊き、おもちやのような小屋で五人で食べる夕食は、重苦しい食卓しか知らない私を、幸福にした。

いつときであつても、あの幸福は、あれから五十余年を過ぎた今でさえ、神崎川の水の透明さと流れの音を、鮮やかに蘇らせてくれる。

神崎川というのは愛知川えちがわの支流である。この水が、わがふるさとの琵琶湖に注ぐのである。野洲のマイアミにも。



姫野カオルコ（ひめの かおるこ）

1958年滋賀県甲賀市（こうかし）生まれ。『昭和の犬』で第150回直木賞を受賞。『彼女は頭が悪いから』で第32回柴田錬三郎賞を受賞。滋賀からの上京者ならではのエッセイに『忍びの滋賀—いつも京都の日陰で』。最新小説は『悪口と幸せ』。

特集

琵琶湖と生きる

目次

巻頭エッセイ

- 2 ひとしづく 外国なのに滋賀県 姫野カオルコ

特集 琵琶湖と生きる

[湖歴]

- 6 概論 人が長年かかわってきた世界でも稀な湖「琵琶湖」 橋本道範
8 開発 水質を保つために長年取り組んだこと 市木繁和
10 価値 固有種を核とする琵琶湖の希少価値 中西正己
12 文化的景観 水辺の生業が残れば文化的景観も維持できる 金田章裕

[湖甦]

- 14 経験 世界に伝えていく琵琶湖の歴史的経験 中村正久
16 道標 MLGsに込めた「母なる湖」への思い 三和伸彦
18 逆水の田んぼ 逆水灌漑が潤す「魚のゆりかご」

[湖人]

- 22 農業 「儲かる地域」目指す琵琶湖の若者たち 清水広行
24 漁業 この風景を残すために漁師の道へ 駒井健也
26 清掃活動 自分の好きな水辺はきれいな方がいい 武田みゆき
28 湖魚料理 暮らしの記憶と湖魚の味を伝える 中川知美
30 文化をつくる 琵琶湖と向き合ってきた記憶と記録を次世代へ 編集部

「水の文化書誌」 欄筆にあたって

- 33 古賀邦雄さんからのメッセージ

連載

- 34 水の文化書誌 63 SDGs——持続可能な開発目標を考える 古賀邦雄
36 みず・ひと・まちの未来モデル 8
「むら」の自治支える小規模集落水道 野田岳仁
42 食の風土記 21 栄養価の高い乳酸発酵食品「ふなずし」
44 Go! Go! 109 水系 24 水廻り廻らす毛細水脈 矢部川 坂本貴啓
50 センター活動報告
51 編集後記/ご案内
(敬称略)

日本一大きな湖「琵琶湖」。古来、人びとは琵琶湖から、あるいは流れ込む数多の川や湖畔に点在する内湖から田畑に水を引き入れ、魚介類を獲り、ヨシを住居や肥料に用いた。文字通り、琵琶湖とともに生きてきた。その姿が大きく変わったのは、主に京阪神地区に水を届けようと1972年(昭和47)に始まった「琵琶湖総合開発事業」(以下、総合開発)だ。今から半世紀あまり前のことである。

およそ1兆9000億円を費やした総合開発は、25年後の1997年(平成9)に終わった。その間、開発と保全のバランスに揺れながらも住民、研究者、行政、企業などが連携して取り組んだ歴史的経緯は「琵琶湖モデル」と呼ばれ、経済成長著しい東南アジア諸国の人たちが学びに訪れている。

その総合開発が終了してさらに25年が経った。琵琶湖の歴史や開発にまつわること(湖歴)、総合開発後の取り組み(湖甦)、未来を見据えた新たな動き(湖人)という3つの視点から、湖とともに生きていくために必要なことを探った。

※湖歴、湖甦、湖人は編集部による造語

琵琶湖の水利用区域と給水人口

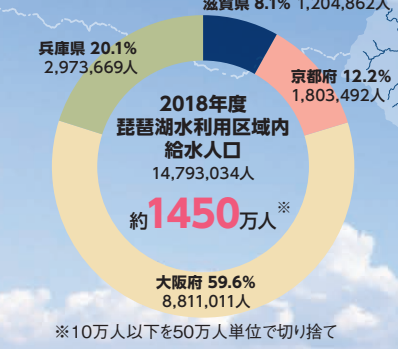
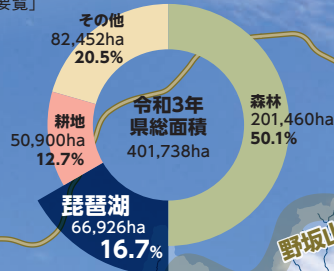
出典：滋賀県「滋賀の環境2022(令和4年版環境白書)」を参考に編集部作成



琵琶湖は滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県の約1,450万人の水道水源となっている。また農業用水や工業用水としても使われている

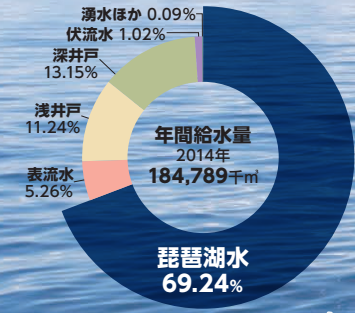
滋賀県の総面積に占める琵琶湖の割合

出典：滋賀県「しがの農林水産業」令和5年度(2023年度)農林水産省「耕地面積調査」、国土交通省「都道府県市区町村別面積調」、滋賀県琵琶湖環境部「滋賀県森林・林業統計要覧」



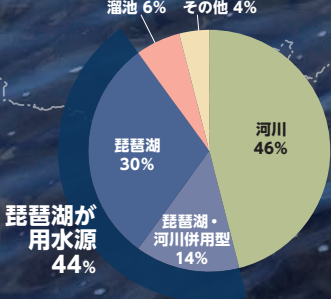
滋賀県の上水道水源

出典：滋賀県「琵琶湖ハンドブック三訂版」



滋賀県の農業用水源に占める琵琶湖の割合

出典：滋賀県「しがの農業農村整備2023」



琵琶湖

琵琶湖に流入する河川数

出典：滋賀県「琵琶湖ハンドブック三訂版」
※直接流入する一級河川

流入河川 **117**
流出河川 **1**

琵琶湖の概要

出典：滋賀県「滋賀の環境2022(令和4年版環境白書)」を参考に編集部作成

集水域 3174km²
面積* 669.26km²
(北湖:南湖=618.0km²:50.7km²=12:1)
南北の延長 63.49km
最大幅 22.8km
最小幅 1.35km
周囲 235.20km
水深(もっとも深いところ) 103.58m
平均の深さ 41.20m
貯水量 275億m³
(北湖273億m³、南湖2億m³)

※総面積は国土地理院「令和4年全国都道府県市区町村別面積調(4月1日時点)」の数値を引用。北湖と南湖の各面積は、琵琶湖環境科学研究センター「GISデータ」の数値を引用

琵琶湖流域の地図

滋賀県「しがの農林水産業」令和5年度(2023年度)および国土交通省国土数値情報「河川データ(平成21年)、湖沼データ(平成17年)、行政区域(令和5)、鉄道(令和4)、高速道路(令和4)」より編集部作成

琵琶湖

世界でも稀な湖

国内最大の湖、琵琶湖。日本人なら知らない人はいないと思うが、その成り立ちや歴史については意外と知らないことが多いかもしれない。琵琶湖の漁撈と魚介類の消費を中心に自然と人間との関係史を研究している滋賀県立琵琶湖博物館の橋本道範さんに、琵琶湖と人びとの歴史的なかかわりについて聞いた。



インタビュー 橋本 道範さん
滋賀県立琵琶湖博物館 専門学芸員

Michinori Hashimoto

1965年岡山県生まれ。1993年京都大学大学院文学研究科博士後期課程国史学専攻中退。博士(文学)。1993年10月から滋賀県教育委員会事務局(仮称)琵琶湖博物館開設準備室勤務、1996年4月から滋賀県立琵琶湖博物館勤務。専門は歴史学(日本中世史専攻)。著書に『日本中世の環境と村落』、編著に『自然・生業・自然観—琵琶湖の地域環境史—』『再考ふなずしの歴史』などがある。

広大で多様な環境に 固有種が棲む古代湖

現在の滋賀県のあたりは、古くは「近江」といわれていました。しかし私は「琵琶湖地域」と呼んでいます。なぜなら「近江」というのは人がつくった地域の名称で、そう呼んでしまうと、それと同等に考える必要があり、自然がつくった地域のことが見えにくくなってしまうからです。なので、「近江」の代わりに「琵琶湖地域」という呼称を使っています。

琵琶湖地域の最大の特徴は、いまでもなく琵琶湖があること。琵琶湖は、日本人なら誰でも知っている日本一大きな湖です。大きいがゆえに多様な環境をもっています。沖合い、深底部、岩礁帯。それぞれ異なるこの三つの環境に適応した生態系があります。もう一つの顕著な特徴は「古い」こと。約400万年の歴史をもちます。今の三重県の伊賀盆地あたりに小さな湖ができたのが、もともとの発端です。それが地殻変動によって移動しながら約43万年前に現在の形に落ち着きました。

その400万年の歴史のなかで進化した種、もしくは琵琶湖にだけ生き残った「固有種」が存在しています。現在確認されているのは貝類、魚類その他の66種です。沖合い、深底部、岩礁帯が形成する環境に多くの固有種が生息していることが、琵琶湖の価値を考えるうえで重要だと思います。

大きくて古く、固有の生態系をもつ。これだけでも際立った特徴ですが、さらに見逃してはいけない特筆すべき点があります。それは、2万年以上にわたって人間がかかわっていること。縄文時代から集落が営まれ、水辺や森を利用し、木をくり抜いた丸木舟で漁を始め、やがて舟運に丸木舟を使う。今も約140万人(滋賀県の人口)が琵琶湖周辺に暮らしています。大きくて古いだけなら、ロシア南東部のバイカル湖など、世界でも琵琶湖を上回る湖はあります。しかし、10万年以上の歴史をもつ「古代湖」のなかでも、これだけ人間のかかわりが深い湖は世界でも稀なのです。

その時々で自分たちの都合のいいように流動します。琵琶湖でもそうでした。

一例を挙げれば、沿岸帯で経済的価値の高い抽水植物のヨシ。古来、屋根葺きの材料や垣根などの建築資材に重用されてきました。同時に、魚類の産卵・生育場としての価値も中世から認識されており、ヨシ地は税の対象ともなっていました。ところが領主のヨシ地に対するこうした認識は18世紀になると転換し、資源としての価値を認めず、新田開発の対象地として認識されるようになります。

琵琶湖に対しての最大の価値づけは治水・利水です。琵琶湖からの唯一の流出河川は瀬田川。水位上昇を防ぐため浚渫して琵琶湖からの流出量が増えると、下流で氾濫が起きることから、上流(琵琶湖)側と下流(京都)側の対立が古くから続きました。瀬田川は軍事的な要衝で、西方からの攻めを防ぐため通りやすくしたくないと思惑も働き、江戸幕府は川浚え工事に介入せず、被害を受ける村々が費用を負担する自普請で川浚えをしたのです。

治水・利水・舟運から 見る琵琶湖の価値変容

人間が自然に対して行なう価値づけは、時代や立場が変わると、

明治政府が南郷洗堰(旧・瀬田川洗堰)を建設



おいしい 琵琶湖

ビワマスの刺し身
撮影協力:あやめ荘(野洲市)



【概論】

人が長年かかわってきた

■ 近世における琵琶湖の舟運と街道、丸子船の分布図



■ 諸浦の親郷	堅田103艘	大津107艘	八幡37艘
■ 湖北四力浦	塩津110艘	大浦 16艘	海津81艘
■ 彦根三湊	松原 28艘	米原 43艘	長浜44艘
			今津108艘

※各浦の船数は1693年(元禄6)のもの。ただし彦根三湊は1711-1736年の船数
 出典：大津歴史博物館 展示会図録『江戸時代の琵琶湖水運—大津百艘船の航跡—』を参考に編集部が改変・作成

してからも、上流と下流の水位をめぐる利害調整はなかなかつきま
 せんでした。
 現代においては1972年(昭
 和47)から「琵琶湖総合開発事業」
 が25年の歳月をかけて実施されま
 した。ただしその過程で、例えば
 湖岸を堤防化することによって陸
 域と水域が分断されて魚が産卵の
 ために遡上できなくなるなど、治
 水・利水による豊かさの追求が生
 態系や水産資源の豊かさを毀損す
 る、といった価値づけの逆転も起
 きているのです。

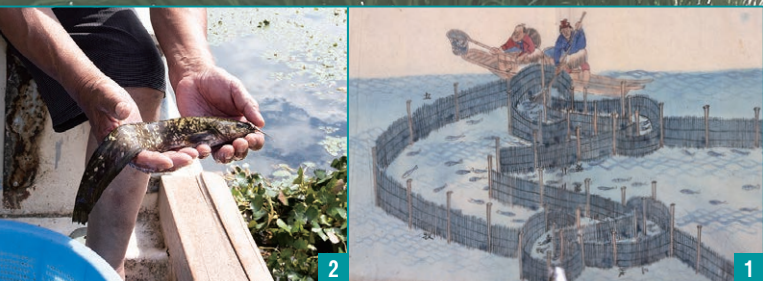
人間がかかわりつづけてきた琵琶
 湖の歴史でもう一点忘れてはな
 して琵琶湖運河の計画がありまし
 た。日本海側へと運河を通せば物
 資を陸揚げせずに京都・大坂へ直
 接運べます。この計画は何度も立
 ち消えになり、最後の加賀藩の計
 画は実現寸前でしたが明治維新に
 より完全に立ち消えになりました。
 これは輸送の主役が舟運から鉄道
 に移ることによる価値づけの転換
 でもありました。

新しい価値づけから 生まれるダイナミズム

らないのは、794年(延暦13)か
 ら1869年(明治2)まで日本の
 首都であった京都がすぐそばにあ
 ること。古くからの名産品である
 ふなずしであれ何であれ、この大
 市場で売買するために生業が行な
 われ、漁撈も続いてきました。
 水資源としての価値。交通の要
 衝としての価値。大市場である京
 都に近いことの価値。これらが、
 人間と琵琶湖の深いかかわりをも
 たらした要素だと考えられます。
 今後もっとも重要なのは、とに
 かく人間がかかわりつづけていく
 ことです。琵琶湖に対する価値づ
 けを、これまでのようにその時々

で転換しながらも、限られた自然
 資源をいかに上手に工夫して使っ
 ていくか、それに尽きるのではな
 いでしょうか。新しい価値づけの
 もとに新しい消費が生まれ、新し
 い生業へとシフトしていく。こう
 したダイナミズムを取り戻すこと
 が重要だと思えます。
 多くの魅力がある琵琶湖でもつ
 とも好きなのは湖魚料理です。例
 えばピワマスの刺し身。沖合いを
 遊泳しているので身がしまってい
 ます。「おいしい固有種」。これが
 私にとって琵琶湖最大の魅力かも
 しれません。

(2023年9月1日取材)



1 明治期に描かれた、琵琶湖の伝統的漁法である「鰻(えり)」の図。
 魚が一度入ったら出られない。『滋賀県下近江国六郡物産図説
 —滋賀郡・栗太郡』(うち、えり壺の図) 滋賀県立琵琶湖博物館蔵

2 大浦湾の鰻漁で獲れたイトコナマス。琵琶湖の固有種。岩礁帯
 に棲み、他のナマスよりも美味という。まだ小さいため撮影後にリリース



【概論】

人が長年かかわってきた世界でも稀な湖「琵琶湖」



【開発】

水質を保つために 長年取り組んだこと

インタビュー

市木 繁和さん

公益財団法人 国際湖沼環境委員会 テクニカルアドバイザー

Shigekazu Ichiki

1979年(昭和54)滋賀県庁に入庁。水質、環境アセスメント、廃棄物関連、温暖化対策と環境系の業務に長く携わる。幼い頃は改修前の野洲川や自宅そばの用水路で魚を追いかけ、今も0.6haの水田で稲作を行なう。



戦後の高度経済成長期を経て、琵琶湖は大きく変わった。1972年(昭和47)から「琵琶湖総合開発事業」(以下、総合開発)がスタート。1997年(平成9)に終了するまで約1兆9000億円を費やした。滋賀県職員として水質、環境アセスメントなど一貫して環境系の業務に携わり、現在は公益財団法人 国際湖沼環境委員会のテクニカルアドバイザーとして海外の視察・研修団に琵琶湖における環境保全の取り組みを伝えている市木繁和さんに話を聞いた。

琵琶湖総合開発事業の 背景にあった利水と治水

1972年(昭和47)に制定された琵琶湖総合開発特別措置法による「琵琶湖総合開発事業」(以下、総合開発)は、二度の期間延長を経て1997年(平成9)まで実施されました。それまで国が一つの湖沼を対象に特別措置法をつくり、その事業に対して予算を割くということはありませんでした。総合開発が行なわれた背景には、大きく二つの理由があります。一つは水源開発、つまり「利水」です。琵琶湖の水は唯一の流

出河川である瀬田川から流れ出て、京都、大阪方面の水源として利用されていますが、戦後の経済復興とそれに伴う都市開発によって下流域はそれまで以上に多くの水を必要としていたのです。

二つ目は「治水」です。瀬田川から流れ出る水の量が限られているため、大雨のときは琵琶湖の水位が上がってしばしば水害が発生しました。京都、大阪方面の水源開発だけでは滋賀県にあまりメリットがないため、地元にも役立つ事業を……という思いがありました。「利水」と「治水」がきっかけとなり、総合開発が始まりました。ただし、水源開発をどのような方法で行なうかはさまざまな案があり、紆余曲折があったそうです。琵琶湖周辺の地盤の低い地域に湖岸堤(堤防)を築き、排水機場を設け、流入河川の改修などを行なうことで治水対策も実施したのです。利水と治水にかかわる流出量のコントロールは、瀬田川洗堰(あらいせき)によ

水質保全に対する 県独自の取り組み

利水と治水に加えて総合開発にはもう一つ異なるフェーズがあります。「水質保全」です。本格的な工業化と都市化によって、琵琶湖の水質の悪化が目に見える形で現れます。国が水質汚濁防止法を制定した1970年(昭和45)の2年後、滋賀県はより厳しい基準を独自に設ける「上乗せ条例」を制定するなど水質保全に取り組んでいましたが、1977年(昭和52)5月に淡水



おいしい 琵琶湖

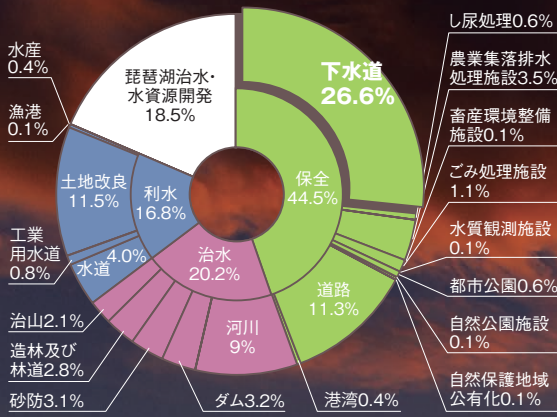
ふなずし
撮影協力:あやめ荘(野洲市)

琵琶湖の課題と対策

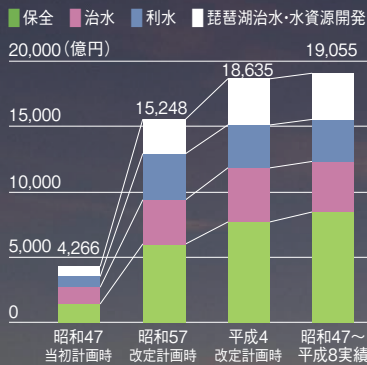


出典:滋賀県「琵琶湖ハンドブック三訂版」を参考に編集部作成

琵琶湖総合開発事業費の内訳

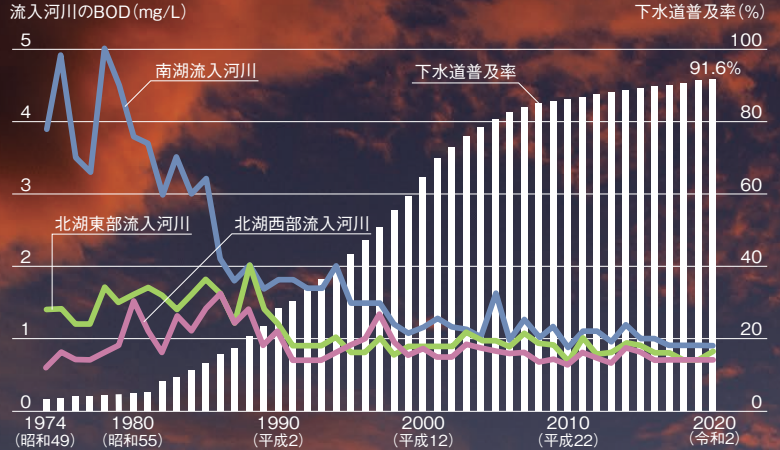


琵琶湖総合開発事業費の推移



出典(上下とも): 琵琶湖総合保全連絡調整会議「琵琶湖の総合的な保全の推進—琵琶湖と人との共生—」(平成15年3月)

滋賀県の下水道普及率と琵琶湖への流入河川の水質【BOD(注)】



出典: 公益財団法人 淡水環境保全財団「明日の淡水」VOL.37 (2022年3月発行)

赤潮が発生したのです。それ以前から水質に問題が生じている認識はあったものの、「琵琶湖の水はきれい」と思っていた県民にはショックな出来事でした。淡水赤潮の原因の一つが合成洗剤に含まれるリンであることがわかり、合成洗剤ではなく粉石けんを使うという県民主体の「石けん運動」が始まります。それを受けて滋賀県は1979年(昭和54)10月、工場・事業所に窒素とリンの排水規制を適用した「滋賀県琵琶湖の富栄養化の防止に関する条例」(以下、琵琶湖条例)を制定、翌年7月1日から施行しました。リンを含む合成洗剤の使用・販売の禁止、農業での肥料の適正使用、家畜のふん尿の適正処理なども盛り込んだこの琵琶湖条例は、水質改善に向けて全国に先駆けたものと評価されました。

ちなみに琵琶湖条例が施行され

この便利な生活も「ほどほど」に

た7月1日を「びわ湖の日」と制定し、今も7月1日前後は10万人以上が清掃活動を行なっています。

総合開発は約1兆9000億円を費やしたプロジェクトでした。事業費のうち、もともと比重が大きかったのが下水道整備で26.6%。全体の4分の1を占めています。

総合開発が始まった頃、滋賀県の下水道処理人口普及率は全国平均を下回っていましたが、今は全国6位。総合開発が終わっても普及率が伸びているのは、下水処理場はすでに完成しており管渠かんきょをつなぐだけからです。今も市街化区域はもちろん、市街化調整区域でも下水道をつないでいますし、220ある農業集落排水処理施設も下水道に順次つなぎ直しています。どうしても難しい地域は合併浄化槽で対応しています。

総合開発の初期に「こんなに広いエリアでやる必要があるのか」という議論もありましたが、リンは下水処理の最後に化学的な凝集沈殿法を用いればしっかり除去できます。また、田植え時期の水田から流れ出る濁水や肥料・農薬を減らすため2003年(平成15)に

「滋賀県環境こだわり農業推進条例」を定め、水質悪化を防ぐ手だてを講じました。これらによってリンや窒素がかかわる富栄養化については今のところ改善傾向にあります。

一方、在来魚介類が減少する問題もあり、生態系保全対策として「マザーレイク21計画」や「琵琶湖保全再生計画」に基づくさまざまな施策を行なっています。

生態系保全は実に困難です。私は化学専攻なので水質だけならば基本的なシミュレーションはこなせますが、生きものが入ってくる途端に難しくなる。あまりに水がきれいだと魚の種類が限定されるうえ量も増えない。水のなかに栄養があつてこそ植物プランクトン、動物プランクトンが増えて魚も生きていけるのです。

人間は昔から生きものと一緒に暮らしてきましたね。私は野洲川やすがわのそばで生まれ育ち、投網でアユを狙ったり、増水後に田んぼへ入り込んだ魚を獲ったりしていました。今の安心で便利な生活もよいけれど、便利さを追求するにも「ほどほど」というレベルがあると思うんです。だからもう少し「人間が退く」という姿勢があってもよいのではないのでしょうか。

(2023年8月22日取材)

(注)BOD

生物が水中にある有機物を分解するのに必要とする酸素の量。汚染度が進むと値は高くなる。BOD5mg/L以下でコイやフナが、3mg/L以下でアユが棲める。





【価値】

固有種を核とする琵琶湖の希少価値

琵琶湖では京阪神を潤す「水資源」の開発が1972年（昭和47）以降進められてきたが、人間活動が琵琶湖に棲む生きものたちにどんな影響を及ぼしてきたのか。プランクトン藻類による水質の変化など、湖沼生態系の機能と構造解析に長年取り組んできた中西正己さんに話を聞いた。

植物プランクトンの現象は大半が未知の世界

琵琶湖という研究対象にどうして出会ったのですか。

琵琶湖との出会いは1968年（昭和43）に遡ります。当時、国際学術連合会議（略称ICSU）による

「国際生物学事業計画（以下、IBP）」というものがありません。これは、

世界の人口爆発による食糧不足の懸念を背景として、森林、草原、海洋、湖沼、河川、湿地を調査対象に、生物生産の基盤となる植物



赤潮の原因とされるプランクトン、ウログレナ アメリカーナ 提供：滋賀県琵琶湖環境科学研究センター

が光合成によって水と二酸化炭素からどれだけだけの有機物を生産することができるかを地球規模で評価することを主目的にしました。琵琶湖が日本の「貧栄養湖沼」の代表調査水域として登録されました。

光合成過程を通して植物プランクトンの環境適応のしくみを研究していた私は京都大学に赴任し、IBP琵琶湖班の一員となり、植物プランクトンを対象として一次生産（注）に関する研究を分担することになりました。

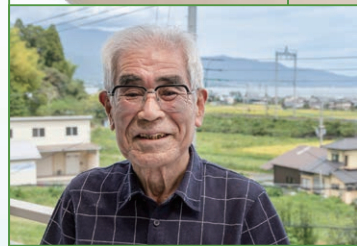
人為的攪乱のもっとも少ない琵琶湖最北端の塩津湾を調査水域としたのですが、その結果には驚きました。植物プランクトンのクロロフィルa量、硝酸態窒素濃度などは、貧栄養湖ではなく、中栄養湖の特徴を反映していたのです。これは調査前に研究者

や学術書から得た情報とはまったく違う結果であり、琵琶湖の実態に初めて触れた体験でした。

その後、琵琶湖の富栄養化が社会問題として注目されますね。

1977年（昭和52）に淡水赤潮が発生しました。湖沼では植物プランクトンの異常発生が起きます。琵琶湖でもこのとき黄色鞭毛藻（ウログレナアメリカーナ）が異常発生していたのです。滋賀県の委託で私たちは発生機構の解明に取り組みましたが、ウログレナの異常発生と琵琶湖の富栄養化との因果関係の解明には至りませんでした。

淡水赤潮の発生は植物プランクトンの異常発生による富栄養化の結果であるとしてよく喧伝されますが、未だ科学的に検証されていません。現に、私は1975年（昭和50）にイタリアの湖でウログレナの大発生に出会いましたが、赤潮は発生しませんでした。



インタビュー

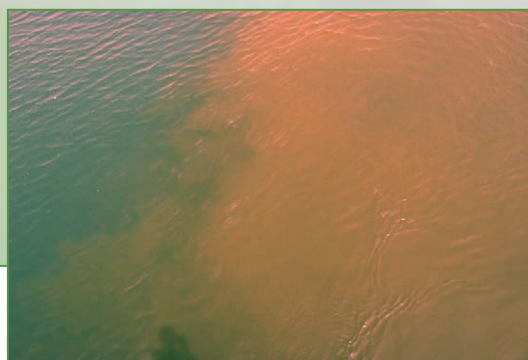
中西 正己さん

京都大学名誉教授
総合地球環境学研究所
名誉教授

Masami Nakanishi

1937年三重県生まれ。東京教育大学（現・筑波大学）理学部を経て東京大学大学院へ。専門は水域生態学。植物プランクトンの有機物生産過程の研究を軸に、湖沼生態系の機能と構造解析に取り組む。

1977年に初めて大規模な淡水赤潮が発生した琵琶湖。1990年代までは数多く観測されていたが、2010年からは発生していない。発生した場合は水道水に異臭味（かび臭）障害が起きるため、浄水場で活性炭の吸着などの対応が図られる
提供：滋賀県環境政策課



優先されるべきは環境保全と水質回復

琵琶湖の価値をどのようにとらえていますか。

琵琶湖の普遍的な価値は「固有種を核とした食物網構造を有する世界に一つしかない生態系」です。この普遍的な価値が保全・再生されるからこそ、人間にとっての価値が維持されます。すなわち、安

（注）一次生産

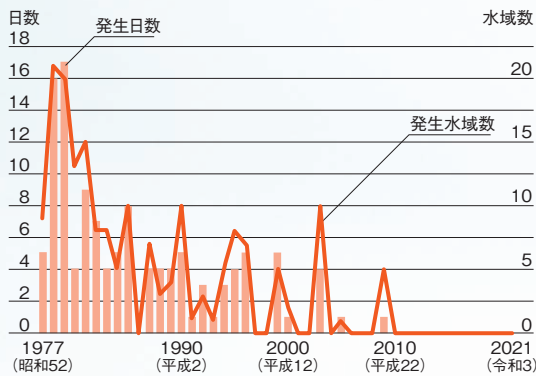
生物が二酸化炭素から有機物を生産すること。この有機物が生態系全体の物質循環の出発点となる。

魚類写真
提供:滋賀県立
琵琶湖博物館



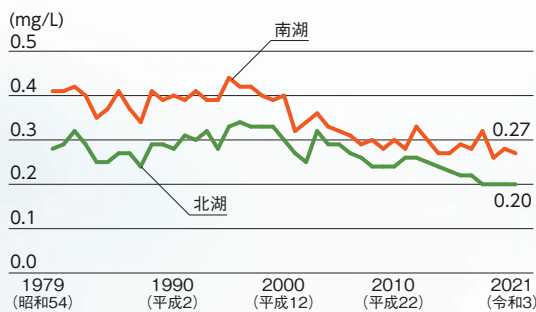
ワタカ

■ 淡水赤潮発生の経年変化

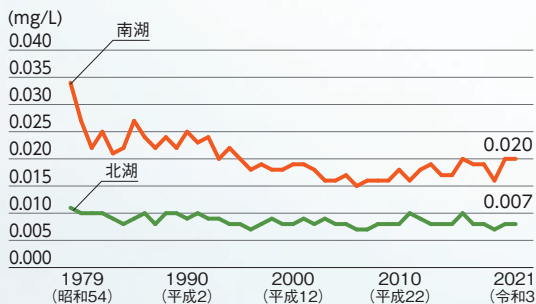


出典:滋賀県「滋賀の環境2022(令和4年版環境白書)」を参考に編集部作成

■ 全窒素(T-N)の推移



■ 全りん(T-P)の推移



※琵琶湖でもっとも幅が狭い箇所にかげられた琵琶湖大橋から北を「北湖(ほっこ)」、南を「南湖(なんこ)」と呼ぶ
出典:滋賀県「滋賀の環境2022(令和4年版環境白書)」を参考に編集部作成

セタジミ 提供:滋賀県



イケチョウガイ
提供:滋賀県立
琵琶湖博物館



ネジレモ(水面を漂っていたものを撮影)

「琵琶湖総合開発に伴う諸工事の差し止め訴訟」の原告団に加わりました。この訴訟の本来の目標は、「諸工事が歴史的にも学術的にも全な水資源、固有種を対象とした漁獲漁業、多様な生物・物理・化学環境の織り成す「情操の場(景観)」といった価値です。」

1972年(昭和47)に公布された琵琶湖総合開発特別措置法の第1条は「琵琶湖の自然環境の保全と汚濁した水質の回復を図りつつ、その水資源の利用と関係住民の福祉とをあわせ増進するため(後略)」と開発の目的を並列して規定しています。本来なら「自然環境の保全と水質の回復」が優先され、そのうえで「水資源の利用と関係住民の福祉」があつて然るべきです。

私は1976年〜1989年の「琵琶湖総合開発に伴う諸工事の差し止め訴訟」の原告団に加わりました。この訴訟の本来の目標は、「諸工事が歴史的にも学術的にも

貴重な琵琶湖とそこに生息する生きものの生活に大きな被害をもたらす」として、日本でも生きものや自然環境に代わって人間が訴訟を起こし裁判できる環境権の法制度を確立することでした。

環境権とは、きれいな空気や水、日照、騒音のない静かな環境などを享受する権利です。国土開発による環境破壊に対抗するために提唱されました。

しかしそれだと受理されないの「琵琶湖の水を利用している原告が健康被害を受ける」という民事訴訟となり、結果的に原告の主張は退けられました。

この裁判で感じたのは環境問題の科学的な検証が非常に難しいことです。当時の滋賀県事が「原告の主張する生態系保全にも考慮

して琵琶湖の保全に努めていかなければならない」と記者会見でコメントしたのは幸いでした。

**人間活動の影響を追う
長期的視野の研究を**

「固有種を核とした世界で唯一の生態系」を軸とした琵琶湖の価値を将来も維持しつづけるには、どうしたらよいでしょうか。

琵琶湖全体の生態系のダイナミズムを踏まえ、どの程度の間活動が琵琶湖に生息する生きものに影響を及ぼすのか、明らかにすることが重要です。これを基本的なテーマとした研究活動が求められます。

まずは調査の方法論から開発しなければいけません。2年や3年で結果が出せるわけがなく、こ

の仕事には10年〜20年以上の長い期間がどうしてもかかります。ですから若手の研究者にしかできません。若手がじっくりと腰を据えて取り組める研究環境の土台が必要です。すぐに結果の出ることにしか予算がつきにくい現状では難しいかもしれませんが、生物の世界に取り組もうと思つたらそれくらいの覚悟がいらいます。

私自身、湖沼のプランクトンの調査研究を通じ、生物を介した自然現象のほとんどは、わかっているようでわかっていないことが多いと実感しました。琵琶湖の未来のためにも、ぜひ長期的な視野に立った研究活動が実現してほしいものです。

(2023年9月2日取材)

おいしい琵琶湖

ホンモロコの酢の物
撮影協力:あやめ荘(野州市)





【文化的景観】

水辺の生業が残れば 文化的景観も維持できる

滋賀県には「重要文化的景観」が7地域選定されている。これは都道府県別で見ると、熊本県（10地域）に次ぐ2番目の多さだ。しかも、7地域のうち6地域が琵琶湖沿岸にある。文化的景観を文化財保護法のなかでどう位置づけるかに尽力し、今は滋賀県で暮らす金田章裕さんに、琵琶湖と文化的景観について聞いた。



インタビュー

金田 章裕さん

京大名誉教授
京都府立京大文学部・歴史館 館長
京都府立公立大学法人 理事長

Akihiro Kinda

1946年富山県生まれ。京大文学部史学科卒業。同大学院文学研究科博士課程単位修得退学。専攻は歴史地理学、人文地理学。京大教授、同理事・副学長、砺波市立砺波散村地域研究所所長などを歴任。『琵琶湖—水辺の文化的景観』『地形と日本人』『文化的景観—生活となりわいの物語』『和食の地理学』など著書多数。

湖畔に色濃く残る 伝統的な水辺の暮らし

琵琶湖には、伝統的な水辺の生活や生業がよく残っています。私たちが今見ても「こんな風に長い間暮らしてきたんだ」と想像できる状態で、かつ集落単位でまともまっています。全国を見渡してもこれほどまとまりよく残っている地域はそうはありませぬ。それは国の「重要文化的景観」に琵琶湖沿岸だけで6地域が選定されていることにも現れていきます。

文化的景観とは、地域の環境に対応しつつ、歴史を通じて形づくられたものであり、地域の文化そのものの一部です。つまり、その地域における人びとの生活と生業を物語るもの。ひとりで表すならば「文化的な伝統を語る景観」です。

琵琶湖総合開発事業（以下、総

合開発）で築かれた、湖岸堤を兼ね

た湖周道路で、水辺と分断された

ように見えますが、湖周道路はさ

ほど高くはないですし、道路を越

えた先には松林と小さな砂浜があ

って水辺につながります。外洋に

面した集落のように巨大な防波堤

や道路で仕切られているわけでは

ないので、総合開発後も基本的な

形はさほど変わっていないんです。

むしろ伝統的な水辺の暮らしと

いう点では、「内湖（注）」と呼ばれ

る潟湖が食糧増産のため昭和初期

から干拓が進められて激減したこ

との方が、影響は大きいでしょう。

内湖は、琵琶湖で生活する人に

とつてもっとも身近な水辺でした。

農業や漁業を生業としていた人た

ちから地続きである内湖は、江戸

時代から石高とは関係なく自由に

使える地先です。小さな畝を仕掛

けておけば家庭で食べる程度の魚

なら獲れましたし、内湖に生えて

いるヨシなどの草を刈り、田畑の

敷き草や牛のエサ、燃料などに用

いていました。

人びとの生

活・生業と琵琶

湖を結ぶとても

強い韌帯だった

内湖が失われ、

さらに湖周道路

ができて、湖面

と人びとのつな

がりが若干薄く

なったのは事実ですが、水とのか

かわりが完全に失われたわけでは

ありません。今も内湖が残る地域

には刈り取ったヨシを乾かして茅

葺屋根に用いたり、寺社の行事用

として松明をつくる事業者がいま

す。有名な高島市・針江集落の

「カバタ」など地下水や表流水の

利用もまだまだ残っています。

**不調和でなければ
変わっても構わない**

文化的景観には2つの大きな要素があります。1つは、文化的景

（注）内湖

沿岸流によって土砂が堆積し、そこにできた潟湖（せきこ）。明治時代、琵琶湖の周囲には内湖が100余りあったという。

おいしい 琵琶湖



コアユの天ぷら

撮影協力:あやめ荘(野洲市)

昭和30年代に撮影された旧松原内湖。
小さな舩(えり)が仕掛けられている
提供:滋賀県立琵琶湖博物館



重要文化的景観に
選定されている滋
賀県高島市の針江
集落

景観と不調和なものを経験したに比べてはいけません。例えば、伝統的な建物や景色や生活・生業が残っている湖岸に高層マンションを新たに建てるのは、周りから見たら不調和でしかない。そうで

観を認定するのは専門家でも行政でもマスコミでも地元の人でも誰でもいいですが、みんなだまどまって取り組むことが必須です。
もう一つ、こちらが主に琵琶湖にかかわる要素ですが、文化的景観は生活と生業を物語るものですから、

人びとの生活とともに「変わっていく」のです。人がそこで暮らしている以上、徐々に変わらざるを得ないのは当然のことです。ただし、今ある文化的

なければ復元してもいいですし、手を入れてもいいです。「ゆっくり変わっていく状態」にしておくことが、これが文化的景観の2つめの要素です。

重要文化的景観に選定されれば、修理や作業に対する補助金も得られます。琵琶湖北部の菅浦は茅葺屋根の「四足門」をつくり直しました。補助金がなければ資金的に厳しかったと聞いています。

水辺の生業のために 琵琶湖の産物を

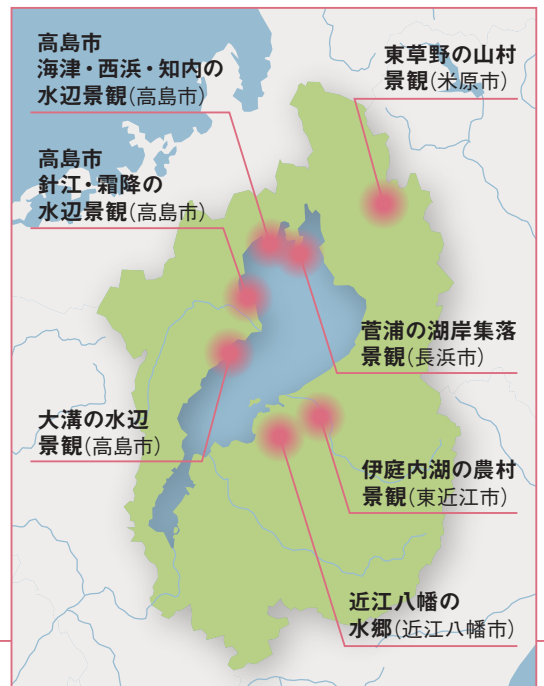
将来にわたって琵琶湖の文化的景観が維持されるために必要なのは、「湖にかかわる生業が残ること

と」です。舩漁をはじめとするさまざまな漁法が残り、ヨシの使い道が絶えなければ、文化的景観は維持されるはず。さらに言えば、

残すために「昔のまま」とが「んじがらめにするのは避けるべきです。緩やかな変更、不調和のない変化ならばよしとしましょう。仮に醒(さめ)のようにならば、多少は形を変えても、残りつづけることの方が大事だからです。

それに生業が残って水面や水辺を使っていれば不要な開発の抑止力にもなります。例えば舩が設置

滋賀県の「重要文化的景観」選定地域



(2023年3月20日官報告示分まで)



1



2

1 菅浦の東と西にある「四足門」(東)。古くから集落の境界を示す結界の門だったとされる 2 菅浦の集落内にある石垣。浜道沿いの家屋や湖岸の田畑を波から守るためにつくられた

されているそばの護岸をコンクリートで固めようとは考えないでしょう。それが、文化財保護法のなかに文化的景観が定められた意味でもあります。
私たちは消費者が生業を後押しするには、琵琶湖の産物をいただくことも手段の一つです。富山県の実家へ行った帰路、私は湖魚販売店や安曇川の道の駅で湖魚や野菜を買って自宅に戻ります。特に好きなのはコアユ。白ワインで炊くといいた味になるんです。
今よりも多くの人が湖魚を味わうようになれば、市場は大きくなるので生業が残り、水辺の文化的景観も維持できる。そういう関係性にも目を向けてほしいですね。

(2023年9月4日取材)





【経験】

世界に伝えていく

琵琶湖の歴史的経験

1984年（昭和59）に開かれた「世界湖沼環境会議」における国連環境計画（以下、UNEP）の提言を受け、その2年後に設立された公益財団法人国際湖沼環境委員会（以下、ILEC）。1994年（平成6）からは海外向けの研修・教育プログラムを企画し、滋賀県や各省庁、地域団体と連携しながら琵琶湖の経験やそこから生まれた施策などを伝えていく。副理事長を務める中村正久さんに、海外に伝えていくことの意義について聞いた。

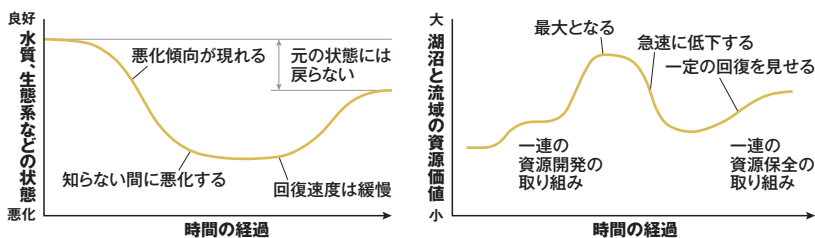


図1 開発と保全によって変化する湖沼環境と資源価値

出典：（公財）国際湖沼環境委員会「世界の湖沼環境の悪化をどう食い止めるか」



図2 ILECの海外向け研修・教育が及ぼす影響

琵琶湖を訪れて学ぶ 海外の湖沼関係者

開発と保全を巡る琵琶湖の経験を語るうえで欠かせないものとして、1972年（昭和47）から25年にわたって実施された「琵琶湖総合開発事業」（以下、琵琶湖総合開発事業）がありま

す。これは後の琵琶湖・淀川流域社会を形づくるうえで非常に重要な事業でした。琵琶湖総合は治水・利水・環境保全を目的にしたものでしたが、当初の中心的な議論のなかには淀川下流域への大量送水を可能にする「琵琶湖の改造」がありました。例えば琵琶湖のくびれ部分に湖中堤防を築き、湖の上流部をダム化すると、湖の沖合いにドーナツ状に堰堤を築き、そのなかの水をくみ上げて下流に送水することで湖岸と堰堤の間の水位を一定に保てば生態系への影響も少ない、といった乱暴な議論が国の省庁や下

流自治体を擁護する形で新聞紙上に紹介されたのは、ほんの数十年前の話です。

それに対して、自然の恩恵と脅威の狭間で湖の沿岸・沖合漁業、流入河川流域や沿岸帯での稲作などを通して独特な社会を形成してきた滋賀県は激しく反発。10年近くの論争を経た結果、大渇水時であっても一定の水量を下流に送水できるように瀬田川洗堰あらいせきの改修と湖岸堤によって水量を制御する、という現在の方法が採用されました。

これはほんの一例で、琵琶湖を擁する滋賀県の多くの地域が、さまざまな利害関係や思惑を乗り越えてきました。そうした琵琶湖の歴史的経験を他の国々に伝えるのは大変意義あることです。現在は（8月下旬）もマレーシアから水資源開発関係者が、琵琶湖や淀川流域の歴史的経験を学びに来られています。

こうした海外の人たちを受け入れて行なう研修・教育プログラム

は1994年（平成6）に開始されましたのでかれこれもう30年です。琵琶湖に滞在する間に自分たちの湖沼に関するアクションプランをつくって帰国しますが、後の湖沼流域管理計画のベースとなることも多いです。

現状を伝えるだけでは 相手の役に立たない

このように継続的に行なってきたILEC研修の卒業生は数百人に上ります。研修では、高度処理を可能とする下水処理場や活発な市民活動など「滋賀県として誇れること」を見てもらうことも重要ですが、表面的な視察では、彼らが政策をつくる際につかる環境保全と開発の葛藤を乗り越える糧には必ずしもなりません。琵琶湖における試行錯誤を、失敗も含めて「あのときはこうだった」「あのころという問題が起きた」というストーリーを学び、彼らが同様



おいしい琵琶湖
ピワマスの煮付
撮影協力：あやめ荘（野洲市）



インタビュー 中村正久さん

公益財団法人 国際湖沼環境委員会 副理事長

Masahisa Nakamura

1945年北海道生まれ。米国イリノイ大学土木環境工学科博士号取得。滋賀県琵琶湖研究所所長、滋賀大学環境総合研究センター長などを歴任。琵琶湖を含む世界40カ国の28の湖沼を約400人の研究者を率いて4年間調査し、6つの要素から成る「統合的湖沼流域管理」を構築。

な状況に遭遇したときに活かせるように研修することが重要です。

例えば地下汚染を取り上げた研修では、汚染が発覚してから数十年にわたる住民、行政、企業による水質浄化や土壌改善の経験を学ぶことがありました。当事者でもあった企業の責任者が困難に直面した状況を赤裸々に語ってくれました。それは研修生が最も感動し、高く評価した研修事例の一つです。

日本がかつてそうだったように、開発一辺倒で水質保全や生態系などにあまり目が行っていない国は多いです。経済が発展する一方、自然環境はどんどん荒廃していく。歯止めをかけたいけれど開発側の圧力は強い。どうすれば……というときに日本の、琵琶湖の歴史的経験が生きてくるわけです。

この海外向け研修・教育は独立行政法人国際協力機構（以下、JICA）の支援によるものですが、成功例だけでなく失敗の経緯もシェアしていくことは、思っている以上の国際貢献となるのです。

琵琶湖の経験も踏まえた「統合的湖沼流域管理」

湖沼はいわば「溜まり水」です。一度悪化すると解決がとても困難

なうえ、水のしくみ自体が常に各方面から大きなストレスを受けるものです。湖沼を持続可能にするための回答を一気に生み出すのは難しいです。そこで私たちは湖沼とその流域を持続可能なものとするためのプラットフォームとして「組織・体制」「政策」「参加」「技術」「情報」「財政」を柱とする「統合的湖沼流域管理」（略称「ILBM」）を提唱しています。琵琶湖に至るまでのプロセスで、琵琶湖はこのILBMにある程度できていたと考えています。

日本では、例えば湖沼にまつわる法律として湖沼水質保全特別措置法という水質改善のためのものがあり、また湖沼は広い意味で河川に含まれるとする河川法も存在します。地域開発や企業活動にかかるさまざまな法律もあります。そういったさまざまな法体系が複雑に関連した政策ができあがる以上、誰もが満足するような「水を巡る社会的なしくみ」は一朝一夕にはできません。社会情勢も制度への要求も時代とともに変遷していきますので、試行錯誤を重ねざるを得ないのです。

また、初期の琵琶湖の議論にあつたように、単に工学的なアプローチだけでは解決が難しい、利害



1 2 ILECが中心となって実施する海外向け研修・教育プログラム。行政、団体、研究者など多数の湖沼関係者が協力している 提供：（公財）国際湖沼環境委員会



関係が複雑な社会的課題はたくさんあります。湖沼流域管理もその一つで、地域のなりたちや歴史を反映する人文社会科学的な見方が自然科学・工学的アプローチに統合されなければ、持続可能な取り組みには結びつきません。

そこでILBMというプラットフォームのもと、立場や専門が異なる人たちが集い、六本柱に沿って「こういう考え方がある」「こんな新しい理論もある」と提示し、議論するうちに、隠れていた課題が浮上することもあります。

温暖化によって各地の水源が枯渇しつつあるなか、水資源として湖沼と地下水に目が向けられている一方で、SDGsに「水」は多く出てきますが「湖沼」はほとんど言及されていません。

しかし、ILECが中心的な役割を果たし、2022年（令和4）の「国連環境総会」で採択された「持続可能な湖沼管理（SLM）」は2023年（令和5）3月に行なわれた「国連水会議」につながりました。今後は琵琶湖の歴史的経験を有する日本が先頭に立って、持続可能な湖沼の在り方をリードしていく必要があると思います。

（2023年8月22日取材）





【道標】

2021年（令和3）7月1日、滋賀県では琵琶湖を切り口とした「マザーレイクゴールズ（略称MLGs）」が策定された。2030年の持続可能社会を目指すための目標で、「清らかさを感じる水に」「豊かな魚介類を取り戻そう」など13のゴールを設定した「琵琶湖版SDGs」ともいえる。その策定にかかわった滋賀県理事の三和伸彦さんに、MLGsに秘めた思いを聞いた。

おいしい琵琶湖
ウロリの卵巻き



撮影協力：あやめ荘（野洲市）

「母なる湖」への思い MLGsに込めた

琵琶湖の周辺に 住むことのメリット

滋賀県長浜市にかつてあった大島水泳場で遊ぶ幼少期の三和伸彦さん（右）と双子の弟（左）
提供：三和伸彦さん

県外の方が抱く琵琶湖のイメージと、実際に住んでいる皆さんの実感には差がありますか。

「そもそも琵琶湖ってどこにあるんですか」「琵琶湖って泳げるんですか」など、県外、特に関東の人などには知られていないことが多いと感じます。琵琶湖周辺に住むメリットはたくさんあるのですが、それも知られていないと思います。例えば滋賀県の気候が安定している理由の一つに、真ん中に琵琶湖

湖があることがあります。夏場に気温が上がっても琵琶湖の水がある程度緩和してくれます。冬場は逆に冷え込みを緩和してくれる。災害も比較的少なく、安定しておいしいお米がとれるのも魅力です。

京都にも近く、かつて琵琶湖は日本海側と都をつなぐ水路として舟運が栄えました。琵琶湖周辺は人が暮らすのに適しており、昔からとても豊かな土地なんです。

ふだんは意識していないけれど、大人になると改めてそのありがたみに気づきます。琵琶湖は私たちにとっていわば「お母ちゃん」みたいな存在です。

Mother Lake Goals

変えよう、あなたと私から



図1 「琵琶湖を切り口としたマザーレイクゴールズ(MLGs)」13のゴール
シンボルロゴは中央に琵琶湖を配し、13のゴールカラーを円形にあしらっている 提供：滋賀県

「水」「土地」「労働力」 工場立地に適した滋賀

琵琶湖周辺には工場がたくさんあると聞きました。

特に高度経済成長期以降、滋賀県は大企業の主力工場が進出するなど内陸工業県として第二次産業が盛んです。なぜなら、企業にとって必要な「水」「土地」「労働力」などが比較的リーズナブルに手に

入るからです。京阪神や中京といった大都市圏にも近く、早くから名神高速道路が通り、インターチェンジのそばに工業団地ができたことも大きいと思います。

かつて日本各地で公害が問題になった時期に、滋賀県は琵琶湖を守るために全国的にも厳しい排水基準を設けました。企業が排水処理に多額の投資をしても工場を存続させているのは、滋賀県に工場があることが環境問題に力を入れ

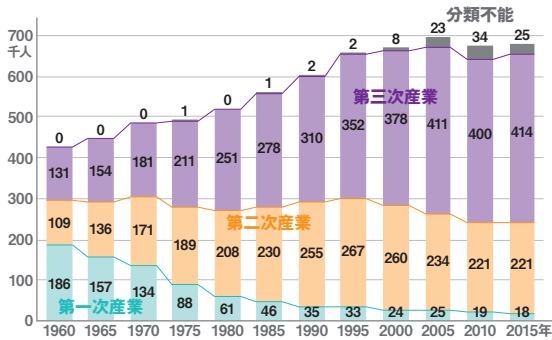


図2 産業別就業者数で見る滋賀県の産業構造

出典: 滋賀県「琵琶湖ハンドブック三訂版」

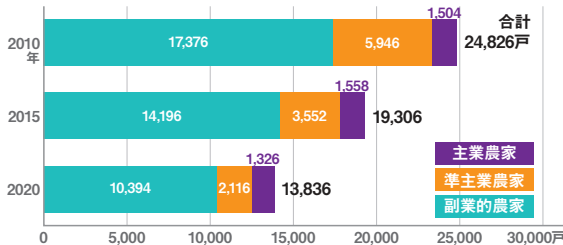


図3 主業農家・副業的農家数の推移

出典: 滋賀県「シン・びわ湖なう2022」

インタビュー
三和伸彦さん

滋賀県理事
琵琶湖政策・MLGs (マザーレイクゴールズ) 推進担当

Nobuhiko Miwa

1963年滋賀県長浜市出身。県の環境行政の技術部門の統括のほか、琵琶湖の水質、水草や外来生物、レジャー利用の適正化など琵琶湖の抱えるさまざまな課題に取り組んでいる。



ている証になるといふ面もあると思います。

ちなみに滋賀県には、第二種兼業農家が多いんです。滋賀は古くから稲作が盛んでしたが、近所に工場があると平日は工場で働いて、週末は農業という生活が成り立つわけです。

県民の暮らしを変えた
琵琶湖総合開発事業

琵琶湖総合開発事業のおかげで暮らしは豊かになった？

1972年(昭和47)に始まった琵琶湖総合開発事業は、琵琶湖の水質を守る「保全」、上下流の洪水被害を解消する「治水」、琵琶湖の水を有効に利用する「利水」を目的とする一大プロジェクトで

した。これによって、県内でも湖岸堤(湖周道路)や下水道をはじめとするさまざまなインフラが整備されるなど、県民の暮らしが便利で豊かに変わったことは事実です。ただし、その一方で、琵琶湖の生態系や環境にも変化が現れていることを忘れてはいけません。

琵琶湖の環境問題といえば、淡水赤潮(以下、赤潮)でしょうか。

1977年(昭和52)に大規模な赤潮が発生したのは衝撃的でした。赤潮の原因の一つは生活排水、特に合成洗剤に含まれているリン。そこで、洗濯にはリンが含まれていない粉石けんを使う、という「石けん運動」が家庭の主婦を中心に瞬く間に広がっていきま

した。「誰かがやってくれる」ではなく、「自分たちがやる」というところがすばらしいと思います。このように、琵琶湖のためにできることを考えて自ら行動できたのは、「自分たちのせいでお母ちゃん(琵琶湖)の具合が悪くなった」という実感があったからだと思います。それなら自分たちがなんとかして、お母ちゃんを元気にしよう、と。そういう感覚と行動は、7月1日の「びわ湖の日」をはじめ、年に3回行なわれている一斉清掃活動など、今も県民に受け継



県民主体で巻き起こった「石けん運動」。写真は、石けんによる上手な洗濯の仕方を教えているところ
提供: 滋賀県環境政策課

がれていますね。

「石けん運動」から
未来への道標「MLGs」へ

「マザーレイクゴールズ(以下、MLGs)」がつくられた経緯を。

先に述べた石けん運動も、富栄養化防止条例ができて、無リンの合成洗剤が登場すると、徐々に下火になっていきました。そして、生物多様性など琵琶湖の環境問題も複雑で多様化していきました。琵琶湖を大事にしたい、という思いは一つなのに、なかなかつながらない。もっと幅広く共有できる目標が必要だと以前から考えていました。

そうした背景もあって生まれた

のが、琵琶湖を切り口とした2030年の持続可能社会へ向けた13の目標「MLGs」です。これは琵琶湖版のSDGsとも呼んでいます。私なりに以前からの思いが一つかなったのかなと思います。私はこれまで「マザーレイク21計画」や「琵琶湖保全再生計画」など、さまざまな県の計画にかかわってきました。しかし行政だけでは解決できないことがたくさんあり、そこを補うには、多くの皆さんの自発的・主体的な取り組みを促すことが重要と考えていました。MLGsは2012年(平成24)から10年にわたって毎年開催してきた「マザーレイクフォーラム・びわコミ会議」の参加者の皆さんからいただいた「びわ湖との約束」をもとにしています。

国連で定められたSDGsはゴールを「自分ごと」にすることが課題になっていますが、MLGsはそもそも「私は、今年1年、琵琶湖のためにこんなことをします」という約束、一人ひとりの自分ごとをみんなのゴールとして共有したものなのです。MLGsに賛同して取り組むことが、結果としてSDGsの達成につながっていくと考えています。

(2023年8月23日取材)





【逆水の田んぼ】

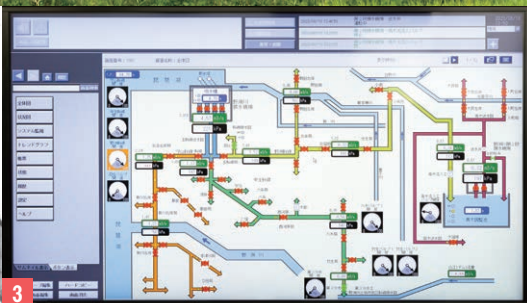


野洲川下流地区の「逆水灌漑」エリア

出典：野洲川下流土地改良区の提供資料をもとに編集部作成

逆水灌漑が潤す

滋賀県の農業用水のうち琵琶湖由来の水は全体の4割強。なかでも琵琶湖総合開発事業で導入されたのが、揚水ポンプで琵琶湖の水を汲み上げて農地を潤す「逆水灌漑」だ。これによって稲作は効率化されたものの、湿田がかさ上げされて乾田となり、産卵期に琵琶湖から水田に上つてきていた魚たちは行き場を失った。途切れたつながりを取り戻すため、琵琶湖で興味深い取り組みが進んでいる。



1 野洲川揚水機場に設置されたポンプ 2 沖合いに設けられた取水塔(青色)。この取水塔の下部から水を取り入れ、揚水機場からポンプで農地に水を送る 3 揚水・送水の状況をリアルタイムで示すモニター。これを見て揚水機場で集中管理している 4 足踏み水車で田に水を入れる人。昭和30年頃 提供：滋賀県立琵琶湖博物館 5 野洲川下流土地改良区事務局長の津田宗蔵さん

琵琶湖の水を使った 独特な灌漑技術

水は高さから低きに流れる。あたりまえの自然の摂理が、琵琶湖のほとりの農業を難しいものにしてきた。戦後に始まった整備が進むまで、湖と陸の境界ははっきりしていなかった。沿岸の多くは湿地で、そこに広がる農地は湿田だったという。

水田耕作に欠かせない水も、自由に使えたわけではない。琵琶湖に注ぎ込む河川や湧水からの供給には限界があった。目前の湖から水路(クリーク)を引けたが、湖や水路と水田はほぼ同じ高さだったので、自然流下はしない。足踏み水車やバーチカルポンプを使い、クリークから畦(あぜ)に水を送り込んでいた。琵琶湖の渇水期にはクリークの水位が下がるので、そうした対処には手間がかかった。水に関する悪条件を解消するた

「魚のゆりかご」

めに導入された技術が、「逆水灌漑」だ。湖の沖に設置した取水塔から湖岸までを導水路でつなぎ、サイフォン技術を使って、内陸にある揚水機場に湖面と同じ水位になる水槽をつくる。そこから巨大なポンプで水を汲み上げ、パイプラインや貯水池などを使いながら、農地に水を行き渡らせる。排水は開水路を別に設けて行なう。水は湖から汲み上げ、湖に戻されるので、湖の水量への影響は小さい。琵琶湖沿岸では、こうした灌漑システムが数多く稼働している。

整備完了から35年 変わりゆく「意識」

琵琶湖東岸の野洲川揚水機場を訪ねた。野洲川下流土地改良区事務局長の津田宗厳さんに、「屋上へ行きましょう」と誘われ、階段を登る。眼下に琵琶湖の景色が広がり、遠くに取水塔も見える。取水塔の下部から水を取り入れているが、

沖にあるのはきれいな水の確保と併せて琵琶湖の水位変動の影響を避けるためだ。背後には整然と区画整理された農地が一望できた。野洲川や排水路の流れもわかる。

「水害の多かった野洲川を国が改修することになり、用水源の転換の必要が生じたのが、逆水灌漑導入のきっかけです。それに合わせ、圃場整備も進めることになり改良区が立ち上がりました」

野洲川下流土地改良区は1970年(昭和45)に設立された。野洲川改修は1979年(昭和54)に、圃場整備と灌漑排水施設の建造は9年後の1988年(昭和63)に完了した。湿地はかさ上げされて乾田化が進み、大型機械が使えるようになった。バルブをひねれば水田に水が入るようにもなった。野洲川下流地域の農業は生まれ変わった。この地域が地元だという津田さんは、1965年(昭和40)生まれの58歳。事業により変わりゆく風

野洲川揚水機場のすぐ横にある排水路。魚はここを通過して湖と水田を行き来する



景のなかで育ってきた。

「小さい頃、自分たちで琵琶湖まで行って泳いだりした記憶はないんです。野洲川が改修される前は、家の近くの伏流水がつくる小川や池で遊んでいました。大きくなり行動範囲が広がった頃には、琵琶湖の水質が悪くなっていて、泳ぐならプールという感覚でした」

改良区の職員になったのは27歳のときだ。圃場整備が完了し、管理業務が中心となってから職責を果たしてきた世代である。ゆえに、改良区が誕生し、地域の農業が変貌する時代を直接体験したわけではないが、生産者の思惑や姿勢が変わってきているのは感じる。

「水は基本的に施設で集中管理できるのですが、集落ごとに当番を立ててもらいサポートをお願いしています。その当番の方の選出や集落内の意思疎通が、円滑に進まなくなってきたのです」

当番を「改良区の職員がやるべきではないか」と言われてしまう

こともある。生産者の農地や施設への執着は変化しつつある。

導入から50年以上が経った設備もあり、漏水などのトラブルも増えてきた。大規模な修繕や更新が必要な箇所も出てきており、それに向け合意形成を進める業務が始まっているが、懸念もある。

「皆さん状況は違いますし、費用負担への考え方もそれぞれですから」

更新にかかる受益者負担については、所有者と耕作者の負担割合についても議論を重ね、調整していくつもりだ。

水田で生まれ育った琵琶湖の魚たち

曲がり角を迎えている野洲川下流域で、興味深い活動をしている生産者がいる。須原地区で農業を営む堀彰男^{あやお}さんだ。近隣の農家と運営する地域団体「せせらぎの郷」で、滋賀県が呼びかける「魚のゆりかご水田プロジェクト」に参加する。

圃場整備以前、このあたりの水田にはクリークから、畦を越えて入ってきたニゴロブナなど、琵琶湖固有の魚たちが多く生息しており、産卵や稚魚の成育の場となっ

ていた。水田が「ゆりかご」のような機能を果たしていたのだ。そんな琵琶湖の豊かな生態系の維持に水田が寄与していた過去に学び、再現しようというのがプロジェクトの趣旨だ。

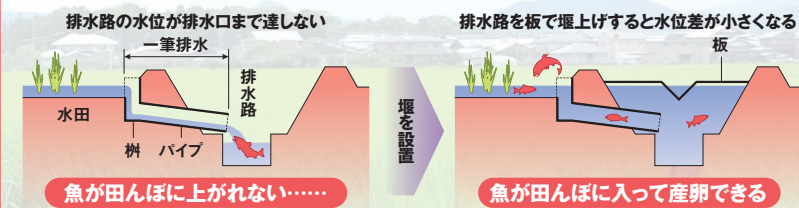
圃場整備によるかさ上げにより、水路（排水路）は水田よりかなり低いところを流れるように変わっていたので、そのままでは魚が水田に入ることはできない。そこで、産卵期にあたる4月頃に排水路に板を立てて水を止め水位を上げ、水田との水位差を埋める「堰上げ式水田魚道」をつくり、魚が水田に入れるようにした。

産卵後、稚魚が一定の大きさに育った頃に、今度は水田から排水路への魚の流下を手助けし、6月には板を外して湖への移動を促す。そうやって、魚と共生する水田をつくり出していくのである。なお、こうした取り組みのもとで生産された米に対し、滋賀県は「魚のゆりかご水田米」として認証を与え、ブランド化を図り、サポートする。

やりがいと実利もたらす「ゆりかご水田」

「せせらぎの郷」は、環境に配慮した農業に取り組むことを目指し

ゆりかご水田のしくみ 出典:滋賀県農村振興課の提供資料をもとに編集部作成



6 魚が田んぼに入れるように排水路の堰上げ作業を行なうせせらぎの郷のメンバーたち 提供:須原魚のゆりかご水田協議会・せせらぎの郷 7 排水路に設置された堰上げ式水田魚道。この状態ならば魚たちは水田と行き来できる 提供:滋賀県農村振興課 8 須原魚のゆりかご水田協議会・せせらぎの郷で代表を務める堀彰男さん

結成された。数年の準備期間を経て正式な設立は2007年(平成19)。「ゆりかご水田」が目指すものに近かったことから、設立の翌年よりプロジェクトに参加した。

せっかく乾田にした区画に多量の水を入れると聞き、昔に戻すよなことだと抵抗を覚える人もいたそうだが、堀さんは比較的スムーズに受け入れられたと言う。

「昔は、道があったのは集落の周りだけで、水田まではクレークに浮かべた田舟で向かっていったんです。遠い水田だと1〜2時間かかりましたよ。大雨のとき、魚たちは勝手に田舟にも入ってきましてよく釣れるので、子どもの頃は毎日のように釣りに行ったものです。あの頃の環境に価値があるという話を聞いて、そんな思い出がよみがえってきたんですよ」

湖から水田にたくさん魚がやってくるようになると、地域の人々を招き「田植え体験」や「生きものの観察」といった行事を開催するようになった。2009年(平成21)からは、設立当初から目指していたオーナー制度を導入。魚が健やかに育つ水田で実ったお米を食べたいという人たちとの契約のもと、米づくりを行なうようにもなった。

「米価が上がらなくなった時代に、自分たちの米に価値を認めてくれる方々とながれるのはありがたい」と堀さん。オーナー制度以外にも、自らの販路を使った販売も広がっているが、「食べる人の顔が見えていると気持ちも違ってくる」と言う。

「ゆりかご水田」は、やりがいと実利の両方を生産者に与えている。

「でも、手がかかりますからね。担い手不足で農業は大規模化、効率化に向かって進んでいます。そういう農業で『ゆりかご水田』のようなものをやる難しさはありますよね。どうなっていくのか……」

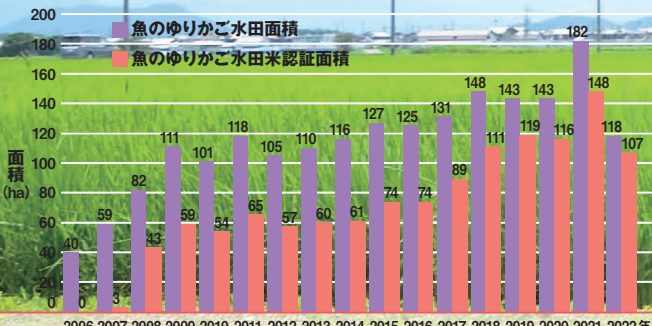
失われた古き良きものの価値に、光を当て直す「ゆりかご水田」。その成果には、農法の考案はもちろん、基盤整備事業やインターネットなどを通じた人と人のつながりなども役割を果たしている。

現代の価値観や技術力のもとでこそ輝ける古き良きもの。琵琶湖には、日本には、そういうものがまだまだたくさん眠っているのだろうか。

(2023年8月18日取材)



かつての須原集落の風景。水路に浮かぶ田舟は移動に使われた 提供：須原魚のゆりかご水田協議会・せせらぎの郷



滋賀県「魚のゆりかご水田」取り組みと認証面積の推移

出典：『しがの農業農村整備2023』

(注)2022年は取り組みの盛んな地域で転作面積が拡大したため減少



撮影協力：BIWAKO DAUGHTERS



堀さんたちが管理する「ゆりかご水田」で魚すくいをする家族

【逆水の田んぼ】

逆水灌漑が潤す「魚のゆりかご」



【農業】

農業

琵琶湖の最北端に位置する長浜市の西浅井町は、1955年（昭和30）に塩津村と永原村が合併してできた地域だ。2010年（平成22）1月に長浜市へ編入されたこの地域の出身者が集まり「ゲリラ炊飯」などさまざまな事業・活動を展開し、注目されている。20〜30代の6人チーム「ONESLASH」は何を目指しているのか、代表の清水行さんを訪ねた。

「儲かる地域」目指す琵琶湖の若者たち



ONESLASHの主要メンバー。右端が清水さん 提供：ONESLASH

水の循環を感じる琵琶湖北部の集落

西浅井はかつて交通の要衝として栄え、日本海（福井県敦賀）から琵琶湖へ、そして淀川を通じて大阪湾へとつながる舟運の中心地であった。

「西浅井に何があるんやと聞かれたら、小学生でも『山門湿原』と答えま

す。約4万年の歴史があるとと言われる湿原から湧

いた水が山や川を流れて大浦から琵琶湖へ流れ込み、瀬田の唐橋を流れて大坂湾へ出て雲になって戻ってくる。西浅井はそういう水の循環が感じられる場所なんです」

そう語るのには、西浅井出身の幼馴染みたちと立ち上げた「ONESLASH」の代表を務める清水行さん。家業の建設業を営みつつ、米づくりを軸としたビジネスから環境事業まで活動の幅は広い。

すべてを支えるのは農業などの一次産業

元スノーボード選手の清水さんは、地元に戻ってくるまで、自分

が米づくりをするとは思っていませんでした。しかし農業に携わり、自ずと地域の環境についても深く学ぶようになっていく。

「例えば木桶屋さんは山から木を出してくれる人がおらんと仕事にならんように、第二次産業や第三次産業は、すべて第一次産業が支えているんです。農業を含め第一次産業は、水がないと成り立たないし、環境の影響をもろに受ける。だから農家は、環境にフォーカスせざるを得ないんですよ」

23歳で故郷の西浅井町庄村に戻り、翌年福井県で就職。30歳で家業を継ぐが、かつての賑わいを失った庄村の祭りを目の当たりにし、2016年（平成28）にONESLASHを結成し、地元を盛り上げる活動を開始した。

「庄村を元気づけるイベントからスタートしました。でもイベントはいずれ疲弊していくもんやからなあと。で考えついたのが農業。米づくりも武器になるやん、て」

キツイ、汚い、儲からない、という農業に対する負のイメージを払拭するためのイベント。その最たるものが、街なかで自分たちが育てた米を炊き、居合わせた人たちにおにぎりを振る舞う「ゲリラ炊飯」だ。





清水広行さん

ONESLASH 代表取締役社長

Hiroyuki Shimizu

1986年滋賀県長浜市生まれ。プロのスノーボーダーを目指して国内外を転戦していたが、両膝の怪我で断念し、西浅井にUターン。2016年12月にONESLASH結成。2022年9月「MLGsふるさと活性化大使」就任。

集落存続のために「稼ぐ」ビジネスを

商売の気があまり感じられないゲリラ炊飯だが、実は「これだけでも食っていけるほど利益が出ている」と清水さんは言う。「最初はプロモーションでしたけど、タダでおにぎりを配っても、その場でお米を買ってもらえたら十分回収できるんですよ。しかも今はオフアアを受けて各地を回っているのがギャラもいただけです。1回行くとそのあと2〜3カ所はオフアアが増えるので、消化しきれん状態ですね」

商売ありきで地元を盛り上げる、というONESLASHの活動はすべて「稼げるビジネス」であることが大前提。今は不動産やパレルなどの事業を多数展開し、「後ろ支えになる柱がたくさんあるから、好きなことをやっているように見せていても成り立つ」のだと清水さんは明かす。「会社の事業で得た収益をいかに地元や農家に還元するか、というサイクルでビジネスを考えています。お米由来のバイオマスプラスチック『ライスレジン』の製造・製品化の事業にしても、農地を守るために必要だったからやっているだけなんです」

4000人の町に4000人の雇用を

米からプラスチック製品をつくれるライスレジンには、古米や破砕米など廃棄されてしまう米を再利用できるメリットがある。だが、それ以上に清水さんが重視しているのは田んぼや農家を守ること。「食べるお米の消費量がこのまま減っていくと、米農家が成り立たなくなると、米農家が増え、ゆくゆくは集落が成り立たなくなってしまう。そこで今チャレンジしているのが、休耕田を利用して資源米をつくること。既存のプラスチックがライスレジンに置き換わっていけばいくほど、米農家全体の生産量が増えていくわけです」

口は2015年(平成27)には約4000人に減少。そして現在は約3600人。清水さんは「実質1年に1集落がなくなっている計算です」と危機感を募らせる。「7年前、地元に戻ると決めたとき、4000人を雇える会社をつくることを目標にしました。それができたら地元を背負ったと胸を張って言えるし、さすがにじいさんを超えられるやろ、と」

何を隠そう、清水さんの祖父は、建設会社を立ち上げただけでなく、庄村の圃場整備を進めるなど地域の発展に寄与した人物でもある。「幼稚園生の頃から『お前のおじいさんには世話になったんや』と地元の人たちから感謝されてきた。それを刷り込まれて三代目になったんです。じいさんが地域のインフラを整えてまちを守ってきて、みんなの職をつくってきたっていうルーツを感じるんで」

アイディア次第でなんでも商売になるのが今の時代。「これからは、百姓の『姓』は商売の『商』と語る清水さんが目指すのは、可能性に満ちた「百商」の集落だ。琵琶湖北端に注ぐ水源そばの集落で、未来への胎動が始まっている。

(2023年8月23日取材)
【農業】



1

1 いきなり街なかで羽釜と薪で米を炊き、塩むすびを振る舞い、西浅井町の米をアピールする「ゲリラ炊飯」。農業プロジェクト「RICE IS COMEDY(米づくりは喜劇だ)」の一つだ 提供: ONESLASH 2 3 食用に適さない古米や破砕米など廃棄されてしまう米を独自の混練技術でアップサイクルしたバイオマスプラスチック「ライスレジン」



2



3

(平成2) 時点
で5176
人だった西
浅井町の人



撮影協力:あやめ荘(野洲市)

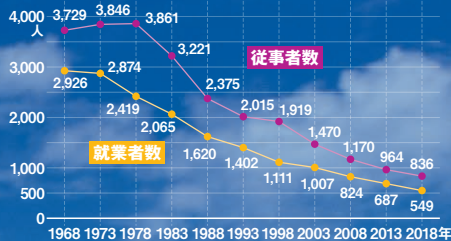
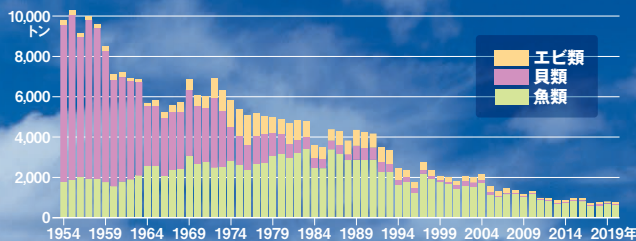


図2 琵琶湖漁業の漁獲量推移

出典：マザーレイクゴールズ (MLGs) 評価報告書『シン・びわ湖なう2022』

図1 琵琶湖の漁業就業者数・従事者数の推移

ふなずしをはじめとする琵琶湖の湖魚料理は重要な文化だ。ピワマスやニゴロブナ、セタシジミなどの固有種、そしてコアユやナマスなどさまざまな魚介類が食されてきた。漁獲量は1955年(昭和30)をピークに減りつづけているが、3年前に漁師として独立した若者がいると聞き、大津市の和邇漁港へ向かった。

旬の魚を捕らえる 琵琶湖伝統の魎魚

9月上旬、漁師の駒井健也さんの船に乗って琵琶湖に出た。駒井さんは湖底に刺さって突き出た杭の曲がりを真つすぐに立て直す。

「今は禁漁期間中(8月21日~11月30日)です。先日台風で曲がった杭を直し、杭に張る網を洗いメンテナンスして12月のかき入れどきに備えます」と駒井さん。

小型定置網の漁具の名が付いた「魎魚」。湖岸近くから沖合に向かって矢印型に網を張り、「つぼ」と呼ばれる行き止まりに魚を誘導して捕まえる。障害物にぶつかるとそれに沿って泳ぐ魚の習性を利用した、琵琶湖の伝統漁法だ。魎魚では30種ほどの魚が獲れるが、もっとも需要が多いのは、成長しても大きさ10cmほどのコアユ。12月に入ると琵琶湖の魎魚師は、いっせいにヒウオ(水魚=コアユになる前の稚魚)を獲る。年間売り上げの3

漁業

〜4割をこの時期に稼ぐという。

「ヒウオはアユ苗として養殖や放流用に全国へ出荷されます。1〜2週間で注文量に達するので、獲りすぎないようにまた禁漁し、1月中旬〜2月頃に再開。ヒウオが成魚のコアユになって浅瀬にまた集まってくるのが5〜6月です」

魎魚のほかにも駒井さんは、竹や塩ビのパイプを寝床として沈める「竹筒漁」でウナギを、適度な水深のところに網を仕掛ける「刺し網漁」で『琵琶湖の宝石』と呼ばれる固有種のピワマスを獲る。

この日は残念ながらウナギもピワマスもかかっていなかった。「生きもの相手ですからね。いたら感謝で、いかなかったら、そんなもんやなあ、と毎度落ち込んでる場合ではないです」と、若き漁師は、さばさばしている。

水とともに暮らす 風景に惹かれて

駒井さんは滋賀県立大学の環境

建築デザイン学科に学び大学院まで進んだ。ヨシを茅葺屋根に使うなど地域資源を循環させるしくみとしての建築をどう現代に活かすかなどに取り組み、ガンジス川やベネチアなど海外を旅するうち「水とともに暮らしている風景」に惹かれた。同時に足元の琵琶湖の魅力にも改めて気づいた。

漁港の漁師に話を聞くうち、漁獲量の減少や後継者不足などを知る。水とともに暮らす琵琶湖の風景を存続させるには建築だけでは難しい。漁師の仕事の魅力なものにして後世につなげることで、と駒井さんは考えるようになった。「机上の空論ではダメ。自分自身で取り組み、やがてはモデルになれば」と漁師になる決心をした。

琵琶湖で漁獲高がもっとも多い漁法は魎魚。国の研修制度を利用して、志賀町漁業協同組合の親方のもとで3年間、魎魚の修行をした。独立して今は3年目だ。「1年目は必死でした。魎一式は親方から引き継いだものもありますが、メンテナンスの道具や他の漁法用の船などを買うのに借金も入りました。9〜11月は、ほぼ無収入で、12月の1〜2週間にすべてを賭けるストレスは半端なかつた。一日中、琵琶湖に出て、よく食

べてはいたんですけれどどんどん痩せていって、漁が始まった時は歩くのもしんどいくらいで」
幸いにして1年目はよく獲れた。だが、もっと獲る漁師は大勢いる。「まだ改善点はたくさんあります。毎年、反省しないといけないことばかり」と研鑽に余念がない。

生産者が出口まで考え 存続できるしくみを

漁の技量の向上と同時に、当初の志どおり「琵琶湖と湖魚の魅力」を伝えることを通じて付加価値を高め、漁師という仕事にプラスになるしくみをつくっていきたい」と駒井さんは考えている。

例えば漁業体験。早朝5時に出発し8時には戻り、獲れた魚を駒井さんが捌き、味わってもらおう。また、生産者と消費者が直にやりとりするオンラインマルシェに「琵琶湖の旬を届ける淡水魚定期便」を出品している。漁協とは別の販売ルートで、一人ひとりの生産者を応援する全国の熱心な淡水魚ファンとつながれる貴重な機会でもある。

地元紙に月1回、「琵琶湖の漁師シヤカリキ奮戦記」と題してエッセ



駒井健也さん

フィッシャーアーキテクト代表

Tatsuya Komai

1992年滋賀県栗東市生まれ。滋賀県立大学環境科学研究科環境建築デザイン学科卒業。同大学院環境科学研究科環境計画学専攻環境空間意匠部門修了。琵琶湖にて3年の漁師研修を経て、2020年に独立。

この風景を残すために漁師の道へ



駒井さんも協力したオリジナル湖魚食品



セイを連載し、ラジオにも出演。これも発信活動の一環だ。泊まりがけで漁業体験をし、感じたことを作品として表現、展示して琵琶湖の暮らしの魅力を広める「BIWAKOアーティスト・イン・レジデンス」も始めたところだ。淡水魚が食卓にのぼる機会は減っている。需要が少なければ高く売れず、やがては獲らなくなる。打開策の一つが、相応の価格設定で魚を体感しながらごちそうとして湖魚を楽しんでもらう、といった駒井さんのような試みだろう。「生産者が出口も確保し、届けるところまで考え、産業として量が減っても成立し存続できるしくみをつくらなければなりません」船から下りてコアユのオリブオイル漬けとゴリ（ヨシノボリの稚魚）の佃煮をごちそうになった。「年間を通じて魚が動く奥深い多様性」と駒井さんが語る琵琶湖の魅力に、ほんの少し触れたような気がした。

(2023年9月1日取材)





『水の文化』59号の特集「釣りの美学」で取材させていただいた「淡海を守る釣り人の会」。その後、さらに多様な団体・企業と組んで清掃活動の規模を拡大している。あれから5年が経ち、副代表兼事務局長となつた武田みゆきさんと再会した。

生まれた時からずっと琵琶湖を眺めてきた

周囲を元気にしてくれる、活発な印象の武田みゆきさん。その原動力を尋ねると、「毎日眺めて、毎日きれいだと思ふ琵琶湖の存在です」とキッパリ。武田さんにとつて特に元気がもらえる場所という守山市のみさき自然公園そばの湖畔へ連れて行ってもらった。

「ちょっとしんどいなーってなつたとき、ここに来て、靴下を脱ぎ、琵琶湖に足をつけるんです。それで、あー、これでエネルギー満ちんやなってなるんですよ」

武田さんに促され、編集部も裸足になって湖水に足をつけてみた。暑い日だったので湖水は温かく、足裏に触れる砂が心地よく、琵琶湖との距離が一気に縮まった気がした。ここからは、北へ伸びる琵琶湖の奥行きも見渡せ、日本一のスケールを体感できる。

琵琶湖近くで生まれ育つた武田さん。子どもの頃からの遊び場といえば、旧草津川とその先に広がる琵琶湖だった。川ではゴリ（ヨシホリの稚魚）を追いかけてたり、湖では貝を探したりして遊んでいた。「ほんまに川と湖で遊んで育つたという感じです」

武田さんが子どもの頃は、家の周囲では農家と漁師が野菜や魚を物々交換するスタイルがまだ残っていて、琵琶湖と暮らしの距離が今よりだいぶ近かったと言う。

そんな武田さんが釣り人たちと一緒に、2017年（平成29）から始めたのが琵琶湖の清掃活動だ。

大好きな水辺が汚れているそれが嫌で拾いつづけた

「ゴミ拾いにこだわっているわけではなくて、もともとは目の前にあるから拾っていただけ。自分の好きな水辺はきれいな方がいいですから。私は『淡海を守る釣り人の会』で清掃活動を始める前からゴミを拾っていました。ゴミ拾いは割と長いんですよ」

そして、2018年（平成30）に環境NPOリーダー海外研修で環境先進国のドイツを訪れたことから、武田さんは環境リーダーとして活動していく覚悟を決める。「この時に一緒に行った全国の第一線で活動している環境リーダー

たちに刺激をもらい、自分の活動に向かう気持ちにもスイッチが入りました」

2021年（令和3）からは、守山市環境政策課環境コミュニケーションという立場で、子どもたちはもちろん、教員も対象にして、環境教育の推進に向き合っている。環境NPOリーダーが集まる日本環境NPOネットワークにも属する武田さんは、コロナ禍でも何かしないといけないと考えた。そして、これぞと思うリーダーたちに声をかけて始めたのが「#あしもとから」という活動。毎月15日に全国で一斉にごみ拾いをして、一斉にSNS上げるもので、「知っているようで知らない、自分たちの地域のことを足元から見直そう」という思いから名づけた。誰でも参加でき、足元からじわりじわりと広がっている。

自分の好きな水辺は

きれいな方がいい



淡海を守る釣り人の会が2023年6月に実施した企業との清掃活動
提供：淡海を守る釣り人の会

武田みゆきさん

淡海を守る釣り人の会 副代表兼事務局長
守山市環境コミュニケーター

Miyuki Takeda

滋賀県草津市出身。飼育員に憧れ専門学校を経て滋賀県立琵琶湖博物館の飼育員となる。その後、大津市にある「ウォーターステーション琵琶湖」で環境団体の支援に携わる。2018年ドイツで環境リーダー研修を受講。2021年から守山市環境コミュニケーター。2023年2月、日本環境NPOネットワーク代表理事に就任。



お気に入りの砂浜で語る武田みゆきさん

自然や環境を守るための 第一歩が「清掃」活動

「ごみを拾ってその先は？」と聞かれるんですが、拾いつづけないとあかんもんやからね。先も何もないですよ」と武田さんは笑うが、誰もが聞いたことがある世界的な企業からも「一緒にごみ拾いをしたい」と問い合わせがくるようになった。今、企業は生き残るために、脱炭素や生物多様性の保全に取り組まないといけない時代だ。琵琶湖での清掃活動はその第一歩として、さまざまな企業から熱い視線が送られている。

「毎回100人くらい参加者が来て、ただのごみ拾いなのに、皆さんめっちゃ楽しみに来はるんですよ。楽しいという気持ち最強で、義務感や使命感では続きません」

人それぞれ参加する楽しみはあるのだから、そのステージが琵琶湖であることも楽しみの大きな要因になっているはずだ。

「参加者のほとんどが滋賀県外から。琵琶湖のためって、全国から来てくれはります。琵琶湖を守るとか、水辺を守るのって、やっぱり最後は人じゃないですか。好きになつてからじゃないと守りたいと思わへんから、好きになつてもらう機会を増やすことが大事だと思います」

ごみ拾いはあくまで第一歩。一度活動した企業にはもつと踏み込んでほしいものの、釣り人の会から誘ったりはしない。1回活動してみても、生物多様性の損失を止めて回復軌道に乗せる「ネイチャーポジティブ」まで進むかどうかは、その企業に任せるスタンスだ。

湖とともにある暮らしが 未来に続くために

では、武田さんが目指す将来像

とはどのようなものなのか。

みんなが環境のことを考えて行動することが日常で、この先どうしていくかを、次の世代の当事者たちと一緒に考えていけたらいいなど思っている。さらに、琵琶湖がより身近な存在になっていて、例えば湖魚を食べることなど、もともとある文化が、新しい時代に沿った新しい形で受け継がれたらいいと考えている。

近年、メディアなどが琵琶湖を取り上げる機会が増えているそうで、それは琵琶湖と一緒に生きていくこと自体がサステナブルにほかならないから。
「ようやく世の中が琵琶湖の魅力に気づいてきたなと思います」と、武田さんは笑みを浮かべた。

(2023年8月21日取材)



撮影協力：駒井健也さん



清掃

暮らしの記憶とる 湖魚の味を伝える

古くから食べ継がれてきた琵琶湖の湖魚料理だが、食生活の洋風化、多様化によって、以前に比べると食卓から遠ざかってしまった。しかし、調理法や味つけ、パッケージを見直し、伝統的な湖魚料理を「ふなずしサンド」など新しい形で提供している店がある。湖東にある「BIWAKO DAUGHTERS（ビワコドーターズ）」を訪ねた。

若者も引き寄せる 現代風のパッケージ

琵琶湖東岸の菖蒲漁港（野洲市）のそばに、湖で獲れた食材を加工販売している小さな店がある。祖父母と両親が二代続けて漁業を営んできた一

家に生まれた中川知美さんが、2016年（平成28）にオープンした「BIWAKO DAUGHTERS（ビワコドーターズ）」だ。
外国の港町にある商店のような、簡素で落ち着いた雰囲気のため、店舗は、ふなずしを漬けるための小屋をリノベーションしたもの。店内には、伝統的な調理法で食されることが多い湖魚を、現代風にアレンジした商品が並ぶ。
フナやビワマス、コイやブラ

ックバスをサンドウィッチやピザなどのメニューにしたり、スジェビヤコアユを甘辛く煮た佃煮を、凝ったデザインのパッケージを貼った瓶に詰めたりして、手に取りやすいものに仕立てている。取材に赴いた日も、夏休みの旅行で訪れていた若者たちが、興味深そうに商品を選んでいく姿があった。
食品の販売以外にも「感無漁」と題した琵琶湖での漁体験のアクティビティを事業として展開する。開店から7年を経た今では、琵琶湖の食と地域社会や観光客とつなぐ、アンテナショップのような店に成長した。
琵琶湖を生業の場としてきた父と母の姿は、中川さんの目にどのよう映っていたのだろうか。そこからは、湖とともにある生活がどんなものなのが見えてくる。

干された漁網が まるで迷路のように

1950年代に祖父母から家業を継いだ両親は、しじみ漁を専業としていた方針を改め、拡大を目指す。琵琶湖全域に船を走らせ、さまざまな魚種を獲るようになった。「琵琶湖の魚で学校を卒業させてもらたわけです。まだたくさん獲れてたし、単価も全然違かった。両親はとても熱心に仕事をしていて、夜になると『お母さん、船乗ってくるから、はよ寝えや』と漁に出ていったものです」と中川さんは言う。

体を張るハードな仕事だが、辛そうな姿は見せなかった。
「2人とも楽しそうでした。学校から帰ると、迎えてくれた母が『たくさん獲れたで！』と、うれしそうにしていたのを覚えています」
住んでいた家の庭には、いつも魚で使った長い網が干され、それが迷路のようだった。そこに、獲れた魚を炊く匂いが漂う。それが、幼少期の原風景だ。
「夏休みには、お菓子を持って漁についていって。沖の方で、ひもにつないでもらって、船からジャボンと飛びこんだりして。のどが

渴くと、父はコップで湖の水をすくって飲んでました。それくらい水がきれいだったやね」

中川さんが子どもの頃、漁業を営む家はすでに減りつつあった。学校でも親が漁師の子どもは数えるほど。サラリーマンの家庭の同級生も多かった。
「うちに遊びに来た友達とご飯を食べることになつたとき、フナの頭が入ったアラ汁を見て『魚と目がおうてる、食べられへん』っておびえて。私は『こんなにおいしいのに！』って食べてましたけど」

きょうだいのなかでもっとも漁に興味をもち、手伝いもよくしていた中川さんにも、両親は家業を継いでほしいとは言わなかった。

小さな店で伝える 湖魚のおいしさ

社会人となった中川さんは、職場で出会った、琵琶湖と釣りが好きだという男性と結婚。大好きなバスフィッシングにかかわる事業を夫が始めることになり、中川さんも退職する。夫の仕事を手伝っ



料理



中川知美さん

BIWAKO DAUGHTERS ショップマネージャー

Tomomi Nakagawa

滋賀県野洲市出身。漁師の両親、祖父母に育てられ、子どもの頃から漁についていき、獲れた湖魚のうろこを手伝うなど湖魚料理に親しむ。「わが家の味」を残したいと2016年11月、琵琶湖で獲れた魚の加工品を扱う「BIWAKO DAUGHTERS」をオープン。



おいしい琵琶湖
びわ湖のお弁当

1



2

1 琵琶湖で獲れる魚介類がぎっしり詰まった「びわ湖のお弁当」(数量限定。要予約) 2 「BIWAKO DAUGHTERS」オリジナルのサンドウィッチ。手前から「ふなずしサンド」「ビワマスクリームサンド」「あゆパン」「スモークタルタルバスバーガー」



ているうちに、琵琶湖や家業のためにも何かしたいという思いが沸き立った。

子どもの頃と比べると琵琶湖とは距離のある生活を送っていたものの、水質は目に見えて悪化しており、かつてのような漁業が難しくなっていることも聞き、このままいいのかも思っていた。

中川さんは、両親が漁の傍ら営んでいた、水揚げした湖魚の加工販売に参画する。漁業にかかわりたいと伝えたとき、父親は賛成しなかったそうだ。抗い難い湖の変化を、間近で見てきたからこそその現実的な反応だったのかもしれない。ただ、琵琶湖が変わってしまったことを父親が誰よりも残念に思っているのを中川さんは感じていた。琵琶湖に寄り添うことは、

父の気持ちに寄り添うことでもあった。

そして「BIWAKO DAUGHTERS」が誕生する。中川さんは「ここは父には理解できないお店なんですよ」と笑うが、湖魚料理を現代風にアレンジするときは古き良き味方も残り、バランスをとることにこだわる。そこにはいつも葛藤がある。

広大な琵琶湖が、今後どんな環境になっていくのか。漁業は続けられないのか。簡単に答えが出る問ではない。だが、中川さんが小さな店で湖魚のおいしさをたくさんの人に伝えつづけることは、湖での漁業の命脈をつないでいる。おいしさが忘れられてしまえば、漁業も忘れられてしまうからだ。

夫と二人三脚で、琵琶湖とともに生きていく道を探る中川さん。その姿は、琵琶湖を船で走り回り、漁に明け暮れていた両親の背中を追いかけているようにも映る。先代をリスペクトしながら、自分らしく新たな世界を切り開こうとする精神も、父親譲りなのかもしれない。

琵琶湖を生業とする暮らしは、姿を変えながら引き継がれていく。

(2023年8月17日取材)



琵琶湖と向き合ってきた

記憶と記録を次世代へ

千年の都を支えた 琵琶湖と湖魚料理

琵琶湖に人がかかわってきた長い長い月のなかで転換点となったのは、1972年（昭和47）から1997年（平成9）まで行なわれた琵琶湖総合開発事業（以下、総合開発）だろう。今号は約半世紀前の総合開発を踏まえ、次の3つの視点から琵琶湖とともに生きるために必要なものを探った。

- ① 総合開発前後の変化（湖歴※）
- ② 総合開発で得た経験を未来につなぐ取り組み（湖魁※）
- ③ 総合開発が終了して25年が経過した今、躍動する人たち（湖人※）

※湖歴、湖魁、湖人は編集部による造語
琵琶湖取材の最後の夜は、長浜市にある黒壁スクエアで「いつも混んでいる」と評判の居酒屋に行き、カウンタ―に座った「旅人さん」というネーミングに惹かれて郷土料理セットを頼み、辛口の地酒をすする。ふなずしはとて、も濃厚で、コアユの天ぷらはほろ苦く、

ピワマスの焼き物は香ばしかった。

店の大将は忙しそうだったが、琵琶湖を取材していると伝えると手を止めて話し相手になってくれた。大将は、

今は長浜市に編入された木之本町の出身で30年ほど前にこの店を構えたそうだ。物心ついた頃、堤防を兼ねた湖周道路（さざなみ街道）はまだなくて、琵琶湖の水位も今より高く、用水路はコンクリート三面張りではなかった。「琵琶湖というよりもそこに注ぐ川で遊んでいましたね」と大将は言う。魚は手づかみできるくらいたくさんいて、裏の山に行けばキノコが生えていて、夏は樹液が出ている木を探してカプトムシを捕まえた。羨ましい子ども時代だ。

翌朝、最終訪問先の京都へ向かう。

琵琶湖は京都と深い関係にあると聞か、いったいどれほどの距離なのか。

車でさざなみ街道を南下し、琵琶湖のなかで対岸がもとも近い場所に掛けられた琵琶湖大橋を渡る。この橋の北側が「北湖」、南側が「南湖」だ。大津の市街地を北上して左へ折れ、平安時代から大津と京都を結ぶ近道

（間道）として利用されてきた「山中越」を進む。比叡山ドライブウェイの料金所を横目にくねくねした峠道を上ると、左折してからたった20分で京都の鴨川に出た。

古都とわずかな距離にあり、北国街道、中山道、東海道が通る琵琶湖地域はまさに交通の要衝だった。物資を運ぶため舟運が発達したのも頷けるし、経済や文化の先進地だったからこそ、戦国時代の武将たちがこの地の支配権を取り合ったのも納得できる。実は京都よりも滋賀の方が寺院の宗教団体数が多いことは意外と知られていない。比叡山の延暦寺の住所も滋賀県大津市坂本本町となっている。

琵琶湖地域でとれる米や野菜や湖魚そして湖上を通ってやってくるさまざまな産品が、千年の都を支えていた。

生きている古代湖が ダムと見なされた時代

時代が下ると、人びとが琵琶湖に求めるものが変わる。例えば「水」だ。

琵琶湖には、一級河川だけで117本、支流を含めるとおよそ450本の川が流れ込んでいる。流れ出るのは瀬田川のみで、そこから宇治川、淀川となり大阪湾に注ぐ。近畿のおよそ1450万人が琵琶湖の水を飲み、そのほか農業や工業にも用いる。つまり日本人の約9人に1人が琵琶湖の水に頼って暮らしていることになる。これは総合開発によるところが大きい。

昭和30年代、阪神地域の人口増と産業発展によって水道用水、工業用水が足りなくなり、琵琶湖の水を「資源」と見なした開発計画が本格化する。

『生態学の「大きな」話』(農文協2007)で「琵琶湖総合開発計画」は近畿各地、特に大阪・神戸地方の家庭・工業用水を確保するため、琵琶湖をダム化させるのを主目的とするものでした」と喝破したのは滋賀県立琵琶湖博物館の元館長である川那部浩哉さんだ。

その方法は難航した。北湖と南湖を堤防で分断して南湖の水位を保ちつつ、北湖の水位を3mまで下げる「南北締切提案」が琵琶湖総合開発協議会から出された。農林省は水深5mで琵琶湖をドーナツ状に二分し、外側を水位マイナス0・3mに保ち、内側を水位マイナス3・0mまで利用する「ドーナツ案」を提案。2年後には南湖のみを対象と

する「南湖ドーナツ案」まで繰り返す。建設省は水中の「もぐり堤」で琵琶湖を南北に分断する「湖中提案」を提示。それに対して滋賀県は、琵琶湖の水をパイプで直接大阪まで送水する「パイプ送水案」を発表する。

最終的には、琵琶湖の水位を最大1・5mまで下げるように変えられ、総合開発は進められていく。そのことでもっとも影響を受けたのは沿岸だ。

「一・五メートルの水位低下に耐えられるようにするため、陸地と湖とは完全といってよいほど分断されました」と川那部さんが記すように、戦前からじわじわ始まっていた内湖の埋め立てと干拓は一気に進み、水田も水路も堤防や水門によって切り離された。

滋賀県の人びとは「琵琶湖をダムと考えると扱われる」ことに強い抵抗感があったようだ。それは2004年(平成16)

7月に滋賀県琵琶湖環境部水政課が淀川水系流域委員会に於てた回答文書からもにじみ出ている。「琵琶湖は、ダムのような人工湖ではなく、自然湖であり、生きている湖である」という基本認識が抜け落ちているのではないだろうか。「むしろ積極的に琵琶湖の水位を回復させることによって、その豊かな自然、生態系を健全な姿で次代に引き継いでいくということが滋賀県の基本姿勢であります」

インターネットで検索すると全文を読むことができるので興味のある方は目を通していただきたい。滋賀県の琵琶湖に対する思いが伝わってくる。

琵琶湖を通じて かつての恩返しを

総合開発は25年続いた。その間に利

琵琶湖略年表

西暦	和暦	出来事
約400万年前		三重県伊賀市付近に浅くて狭い湖ができる(大山田湖)
約40万年前		琵琶湖が今とほぼ同じ位置に定まる
約6500年前		縄文土器がつくられ、淡水の貝塚ができる(石山貝塚)
約4500年前頃		琵琶湖で丸木舟を使用
667	天智6	天智天皇(中大兄皇子)が近江大津宮に都を遷す
788	延暦7	最澄が比叡山に一乗止観院を建てる(延暦寺のはじまり)
794	延暦13	京都(平安京)に都が遷る
1571	元龜2	織田信長が山門(延暦寺)を焼き討ち
1576	天正4	安土城の築城が始まる
1583	天正11	賤ヶ岳の戦い(長浜市)に勝利した秀吉が信長の後継に
1604	慶長9	彦根城の築城が始まる
1842	天保13	甲賀・野洲・栗太郎の農民による天保一揆
1872	明治5	「滋賀県」誕生
1880	明治13	大津-京都間の鉄道開通
1890	明治23	琵琶湖疏水が完成(第一疎水)
1893	明治26	瀬田川浚渫(しゅんせつ)工事が完成
1896	明治29	琵琶湖大洪水が発生
1905	明治38	南郷洗堰(あらいげき)設置
1939	昭和14	現・滋賀県庁舎ができる
1942	昭和17	内湖の干拓が始まる
1952	昭和27	専門家による「琵琶湖総合開発に対する意見書」が建設大臣に提出される
1957	昭和32	大中の湖の干拓に着手(1967年完成)
1960	昭和35	近畿地方建設局など琵琶湖総合開発協議会が堅田-守山間に堤防を築き、琵琶湖を南湖と北湖に分ける「堅田締切提案」発表
1961	昭和36	瀬田川洗堰を改築
1962	昭和37	農林省が湖中に堤防を築き琵琶湖を外湖と内湖に分ける「ドーナツ案」発表
1963	昭和38	滋賀県が琵琶湖の水をパイプで直接大阪まで送水する「パイプ送水案」発表
1964	昭和39	農林省が「南湖ドーナツ案」、建設省が「湖中提案」を発表 琵琶湖大橋が開通
1969	昭和44	琵琶湖にかび臭発生、京都市水道で初めてかび臭いと苦情 4月、志賀町(現・大津市)沖で局部的な赤潮発生 5月「琵琶湖総合開発特別措置法」が衆議院で修正可決、6月公布。 琵琶湖総合開発事業始まる
1972	昭和47	近江大橋が開通
1974	昭和49	5月、赤潮大発生 10月、合成洗剤追放全国集会、大津で開催
1977	昭和52	「びわ湖を守る粉石けん使用推進県民運動」県連絡会議結成
1980	昭和55	「滋賀県琵琶湖の富栄養化の防止に関する条例」(琵琶湖条例)施行
1981	昭和56	琵琶湖条例1周年を記念して7月1日を「びわ湖の日」と決定
1982	昭和57	琵琶湖研究所発足
1983	昭和58	学習船「うみのこ」就航
1984	昭和59	第1回世界湖沼会議(琵琶湖・大津)開催
1986	昭和61	国際湖沼環境委員会(ILEC)設立
1988	昭和63	「よみがえれ琵琶湖」署名運動が起きる。約34万人の署名を集め家庭排水の早期対策を求める請願書を県議会に提出し採択される 京滋(けいじ)バイパス開通
1993	平成5	琵琶湖がラムサール条約の登録湿地に決定
1996	平成8	滋賀県立琵琶湖博物館が開館
2000	平成12	「マザーレイク21計画」を策定
2003	平成15	「滋賀県環境こだわり農業推進条例」制定
2005	平成17	滋賀県琵琶湖・環境科学センター開所
2006	平成18	日本初の重要な文化的景観として「近江八幡の水郷」が選定
2012	平成24	「マザーレイクフォーラム」設立
2013	平成25	「内湖再生全体ビジョン」策定
2015	平成27	「琵琶湖の保全及び再生に関する法律」(琵琶湖保全再生法)が施行
2017	平成29	「琵琶湖保全再生施策に関する計画」策定
2018	平成30	2代目「うみのこ」就航
2019	平成31	琵琶湖北湖で観測史上初の全層循環未完了
2021	令和3	「マザーレイクゴールズ(MLGs)アジェンダ」策定
2022	令和4	琵琶湖システムが世界農業遺産に認定

参考文献:国土交通省近畿地方整備局琵琶湖河川事務所「瀬田川堰堤」パンフレット、大津市歴史博物館 常設展示解説シート「大津の略年表」(2018年3月15発行)、大津市歴史博物館HP、近江八幡市HP、滋賀県「滋賀の環境2022」(令和4年度版環境白書)巻末資料、滋賀県立公文書館 展示図録「琵琶湖の水をめぐって」、滋賀県HP「滋賀のあゆみが分かる歴史年表」



湖上を進む学習船「うみのこ」。滋賀県内の小学校5年生は船上で1泊2日の体験型教育を受ける

世界の水環境の課題解決に貢献

水環境保全と適切な利用

地域経済の発展

1 住民の取り組み

環境学習 / 石けん運動 / ヨシ群落の保全 / 琵琶湖一斉清掃 / 河川流域の保全活動など

2 行政の取り組み

条例による規制や制度設計 / 排水事業者の監視 / 環境白書の作成 / 下水道の整備 / 水道・農業用水の整備 / 環境学習

3 企業(工場等)の取り組み

法令遵守 / ISOによる環境管理 / 自主検査と管理の徹底 / 行政や企業間のネットワーク構築による環境改善努力など

4 大学等研究機関 水環境関連企業の取り組み

調査研究 / 技術開発 / 知識・情報・技術・ノウハウの創出・蓄積・提供 / 水環境商品・サービスの開発

水・治水から水質保全、そして生態系保全へと琵琶湖へのまなざしも変わっていき、少しくもよい方向へと進むようにと住民、研究機関、行政、企業が連携して

カギは原体験と積み重ねた記録

これは日本が過去に受けた恩を返しているだけなのだ。1953年(昭和28)から1966年(昭和41)まで、日本は世界銀行から31のプロジェクトに対して融資を受けた。そこには東海道新幹線と東名高速道路も含まれる。「日本は熱帯地域で産出される木材も輸入しました。整った街並みはそのおかげ。東南アジア諸国にも恩があるんです」と中村さんは言う。「琵琶湖の経験を伝えることは世界への恩返し。それが「琵琶湖モデル」の本質だった。

取り組んだその環境保全活動は「琵琶湖モデル」と呼ばれ、注目を集めている。経済成長著しい東南アジア諸国の関係者たちが視察に訪れ、「琵琶湖の歴史的経験」を自国の施策に反映できないかと試行錯誤している。しかもそれは最近始まったことではなく、すでに30年が経つ。右の「琵琶湖モデル概念図」だけでは伝わりづらいが、国や分野や立場を越えて、人びとはつながりつつある。編集部が訪ねた時に研修していたのはマレーシアの開発側の人びと。これは同国の環境保全側が「開発側にも琵琶湖を見てもらって波長を合わせた」とリクエストして実現したもの。だからうまくいったこともいかなかったことも含めて歴史的経験を伝える。ILEC(公益財団法人国際湖沼環境委員会)の中村正久さんはそうじゃないと言う。

人は水が得られない場所には住みつかず飲めるくらいきれいだっただけで、水による生業が受け継がれてきた。堀彰男さんは化学肥料、除草剤をできるだけ使わずに米を育て、その米から生まれた純米吟醸酒を販売する。ONESHASHの清水広行さんは琵琶湖最北端にある地元に戻って農業の可能性に気づく。水とともに暮らす風景を残すために自分がモデルになろうと漁師に転じた駒井健也さんは、遊んでいた小川が道路工事で埋め立てられたことを今も覚えている。湖畔で一人ごみを拾っていて出会った人たちが清掃活動を広げる武田みゆきさんも、湖魚料理を現代風にアレンジして漁業を守ろうとするBIWAKODOUGH

TERSの中川知美さんも、琵琶湖や水辺に原体験がある。そして、この方々は今、子どもたちに体験の場を提供している。それはきつと、琵琶湖における原体験がその後の人生に影響を与えることを知っているからだ。滋賀県には毅然とした態度で琵琶湖を守ろうとする風土がある。だから「未来への投資」を欠かさない。そして、自分たちが経験したことをできる限り伝えようと記録しつづけている。武田さんと湖畔にいたとき、湖上をゆっくり走る学習船「うみのこ」を見た。県内すべての子どもたちが小学校5年生になるとこの船に乗る。他校の子たちと一緒に2日間(コロナ禍を除く)を船上で過ごし、船を下りての街歩きも含めて琵琶湖と滋賀を深く学ぶ。始まったのは1983年(昭和58)だから来年で40周年。今の「うみのこ」は2018年(平成30)に就航した二代目で、その建造に際しては地元企業や県民からの寄付金も力になったという。何度か足を運んだ滋賀県立琵琶湖博物館は、博物館と水族館が一体になったようなとても楽しい場所だ。子どもがそのまま湖畔で遊べるようにもなっていて、家族連れが大勢訪れていた。ILECの事務所も同じ敷地にある。これらは一例で、ほかにもさまざまな方法で、次の世代が幼少期に琵琶湖を体験できる機会をつくっている。そして、琵琶湖の過去の記録もしつ

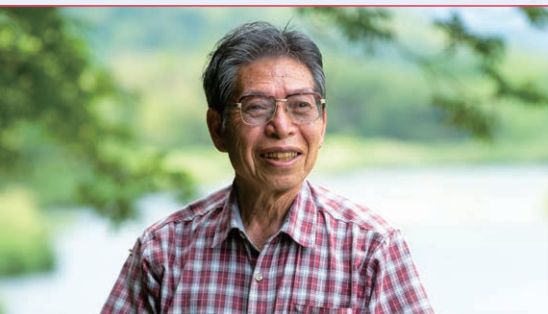


かりまとめられている。省庁の統計データよりも時系列で追いやすのは、県庁をはじめ各機関の努力の賜物だ。オールカラー260ページ、歴史から暮らし、地形、気候、水循環、生きもの、水質まで網羅する『琵琶湖ハンドブック』を、環境保全の普及に努める人たちに無償配布していることにも驚く。今年「うみのこ」に乗った小学校5年生は、四半世紀後には30代半ば。50年経っても60歳だ。その頃、あるいは100年後、200年後、琵琶湖はどうなっているだろうか。……数多ある漁港すべてに宿があり、湖上を行き交う船がそれらを結ぶ。観光客は農業・漁業・林業・ごみ拾いをすべて体験できるツアーに参加し、長期滞在しながら湖魚料理を楽しむ。復活した内湖では魚が手づかみでできるくらい増え、網を片手に子どもたちが走り回る……そんなことを夢想する。人びとが琵琶湖と向き合ってきたことを伝えようとするのは、「次世代が受け継いで、今よりいい琵琶湖にしてくれれば」という確信にも似た思いがあるからではないか。開発と保全のバランスに悩み、でもあきらめずに考えが異なる人とも話し合ったその経験のうえに、次世代は新たな試みを行ない、文化は花開く。今できることを一所懸命に、そして記憶と記録を余すことなく伝えるのがもっとも大切なのだと気づかされた。

一度は干拓した農地を内湖に戻そうと滋賀県が再生に取り組んでいる早崎内湖



文化をつくる



20年以上続いた連載「水の文化書誌」執筆者の古賀邦雄さん。山口県の佐波川にて撮影

「水の文化書誌」連載初回の誌面（『水の文化』10号）

久留米大学御井図書館内に設置された「古賀邦雄河川文庫」

水の文化書誌
欄筆にあたって

古賀邦雄さんからのメッセージ

「水の文化書誌」は21年半にも及ぶ長期連載となりました。そうですか、もうそんなになりますか。思い起こせば、1996年（平成8）に編著として出版した『水・河川・湖沼関係文献集―これから水と河川及び環境を学ぶ人のために―』がきっかけでした。この本は1882年（明治15）から1994年（平成6）に国内で発行された水・河川・湖沼関係の単行本およそ1万冊を収録したのですが、それを陣内秀信さんが見つけてくださって、ミツカン水の文化センターをご紹介いただいたんです。

発端は私が水資源開発公団（現・独立行政法人水資源機構）に勤めていたときに「本を集めて整理してはどうか？」と上司から言われたこと。それ以来、本を収集して分類してきました。水に関する本はほんとうにたくさんありますが、特に河川に関する本はその川が流れている地域に足を運ばないと入手できないものが多いです。私の地元、筑後川の本が関東ではなかなか見つからないように、信濃川に関する本なら新潟県へ行くのが一番いい。ときどき坂本貴啓さんの連載「Go! Go! 109水系」の取材に同行させてもらいましたが、書店を覗いては希少な本を購入したこともあります。

—— 津々浦々から集めた書籍を所蔵する「古賀河川図書館」

た頃と今とでは大きな変化がありますからね。
—— 読者へのメッセージや当センターへの期待などをお願いします。

水は生活すべてにかかわってくるものです。水があるから米や野菜ができるし、水があるからエネルギーも生み出せます。「水と食料とエネルギー」がなければ人間は生きていきません。なかでも「水」はその基盤をなすものだと思うので、

を開きました。

2008年（平成20）5月ですね。口コミで徐々に知られるようになり、「こういう本はないですか？」と全国から多くの人を訪ねてくれました。それでネットワークが広がり、知り合いも増えたのは私にとってかけがえのない財産です。

2020年（令和2）3月に、所蔵していた約1万2000冊を久留米大学御井図書館に寄贈しました。全国の大学図書館や国立国会図書館にない貴重な資料も多くの評価を受け、「古賀邦雄河川文庫」を開設してくれました。きちんと管理してくれるのでありがたいことです。

—— 書籍は今も集めているのですか？

今も書店に行くと、新しい河川の本が毎月並びますので、目についたものは買い求め「納入河川書」として御井図書館に納めています。毎月50冊ほどでしょうか。これはもう私のライフワークですね。

使命感というほど大げさなものではありませんが、「本を通じて当時の状況を記録として残しておく」ことは後に役立つのではないかと考えています。地球環境では気候変動とそれへの対処が問題になっていますし、線状降水帯という言葉も最近出てきたもの。これらはほんの一例ですが、私が生まれ

読者の皆さんにはこれからも興味をもってもらいたいですし、ぜひ現場も歩いていただきたいです。

ミツカン水の文化センターがすごいのは継続していること。かつていろいろな機関が水や河川に関して取り組んでいましたが、今はなくなってしまうました。ですからずっと続けていたいただきたいですし、時にはみんなで集まって話し合うシンポジウムも開いていただきたいですね。

編集部より

古賀さんには「水の文化書誌」の連載だけでなく、当センターのアドバイザーとしても長年にわたり数々のご助言をいただきました。坂本貴啓さんの連載「Go! Go! 109水系」の取材にもご同行いただき、編集部に知識を授けてくださいました。ありがとうございました。

SDGs

— 持続可能な開発目標を考える



古賀 邦雄

こが くにお

古賀河川図書館長

水・河川・湖沼関係文献研究会

1967年西南学院大学卒業。水資源開発公団（現・独立行政法人水資源機構）に入社。30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集。2001年退職し現在、日本河川協会、ふくおかの川と水の会に所属。2008年5月に収集した書籍を所蔵する「古賀河川図書館」を開設。

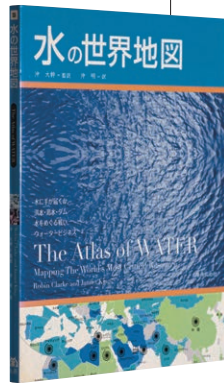
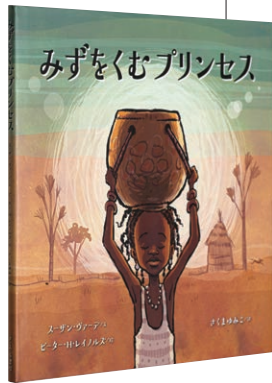
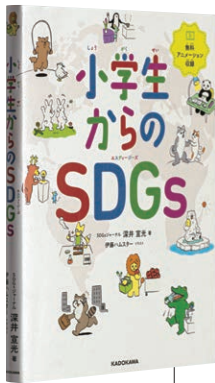
平成26年公益社団法人日本河川協会の河川功労者表彰を受賞。

持続可能な開発目標とは

ロビン・クラーク／ジャネット・キング著・沖大幹監訳『水の世界地図』（丸善・2006）によれば、私たちの生存のカギは、海洋から蒸発する水のうち、ある程度の量が陸上に降り、河川を潤し土に水を与えそして地下の帯水層を補填してくれることにある。これは自然の水循環のなかで淡水供給の可能な部分であり、私たちはこれに依存して生きている。世界の水供給は危機に瀕している。スーザン・ヴァーデ文・ピーター・日・レイノルズ画『みずをくむプリンセス』（さ・え・ら書房・2020）は、西アフリカのブルキナファソで毎朝母と一緒に水汲みに出かける少女の話である。多くの女性たちも水汲みに通う。「ずっとずっと」とおくまで きょうも わたしは みずを くみにいく つめたくて きれいな みずが あるといいな いつのひか きつと」。今、アフリカでは井戸を掘る運動が起きている。

世界は戦争や内戦、難民、さらに貧困、人種差別、環境破壊などさまざまな問題に直面している。こうした地球規模の問題を解決するために「誰一人取り残さない」という理念のもと、国際連合の加盟193カ国が達成を目指すのが2030年までの持続可能な開発目標SDGs（Sustainable Development Goals）だ。SDGsには17の目標が定められた。その過程を追ってみる。

岩田元喜・文『基礎からわかる！SDGs』（メディアアックス・2021）は、1972年『成長の限界』の出版が人類に警告を与え、その後、次のように持続可能な開発目標が制定されたこと記す。1980年「持続可能な開発」の概念が公表され、1992年リオで「地球サミット」開催。1997年地球温暖化への世界的取り組み「京都議定書」採択。2000年開発途上国の課題解決を目指す「MDGs」（ミレニアム開発目標）採択、2012年リオ+20「アジェンダ21」採択、2015年SD



Gsの17の目標が国連総会において全会一致で採択された。

17の目標は、①貧困をなくそう②飢餓をゼロに③すべての人に健康と福祉を④質の高い教育をみんなに⑤ジェンダー平等を実現しよう⑥安全な水とトイレを世界中に⑦エネルギーをみんなに、そしてクリーンに⑧働きがいも経済成長も⑨産業と技術革新の基盤をつくろう⑩人や国の不平等をなくそう⑪住み続けられるまちづくりを⑫つくる責任つかう責任⑬気候変動に具体的な対策を⑭海の豊かさを守ろう⑮陸の豊かさを守ろう⑯平和と公正をすべての人に⑰パートナーシップで目標を達成しよう、と定められている。

17の目標のうち、①貧困をなくそう、②飢餓をゼロに、⑥安全な水とトイレを世界中に、⑭海の豊かさを守ろう、⑮陸の豊かさを守ろうについて、気候変動に対する具体策を追ってみよう。

貧困をなくそう、飢餓をゼロに

深井宣光著『小学生からのSDGs』（KADOKAWA・2021）によると、世界には家にお金がなく学校に行かせてもらえず、毎日16時間働いている子どもが約1億6000万人いる。これは世界の子ども10人に1人の割合である。食べるものがずっとなくて栄養不足で死んでしまうほどに苦しい生活をしなければならない世界の人が8億1100万人いる。こちらも10人に1人の割合である。

世界の子ども3890万人の5歳未満が栄養不良である。飢餓で苦しむ国では食べ物が少ないので痩せるイメージがあるが、長く食べものが手に入らないと肥満や過体重で体調が悪くなる。日本では「最後におなかいっぱい食べさせられなくて、ごめんね」と遺していった母子の悲しい事件が起こった。日本の子どもの貧困率は1980年代から上昇傾向で、今日では、7人に1人が貧困状態にあり、特にひとり親世帯の相対的貧困率は深刻で、ほぼ2世帯に1世帯が貧困状態にあ

る。一方で食品ロスがある。2019年度には年間570万トンの食品が捨てられており、これは日本人一人あたりお茶碗1杯分ほどのご飯が毎日捨てられている計算だ。みきつきみ著『すぐできることからがんばってしよう』もSDGs（弘文堂・2021）が詳しい。

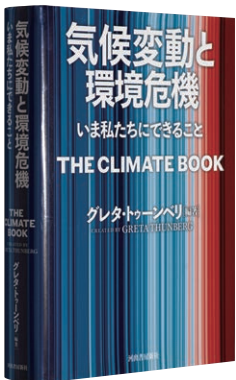
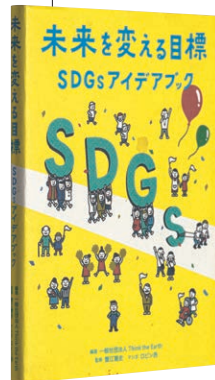
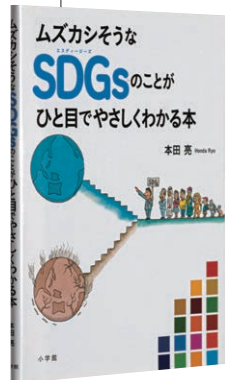
安全な水とトイレを世界中に

本田亮著『ムズカシそうなSDGsのことがひと目でやさしくわかる本』（小学館・2021）によると、2017年時点で安全に管理された水を使用することができない人は21億人いて、毎日8000人の乳幼児が汚れた水による下痢症で亡くなっている。安全に管理された飲み水とは、自宅にあり、必要なときに入手でき、排せつ物や化学物質に汚染されていない水源から得られる水で、基本的には30分以内で汲めるきれいな飲み水である。齋藤孝著『こともSDGs大図鑑365』（実務教育出版・2022）は、世界で水道水が飲める国は、日本を含めてオランダ、フィンランド、デンマークなど12カ国しかないと記す。日本人は恵まれている。

バウンド著・秋山宏次郎監修『数字でわかる！こともSDGs地球がいまどんな状態かわかる本』（カンゼン・2021）によると、家にトイレがなく外で用を足している人が6億7300万人もいる。排泄物がきちんと処理されないと、汚染された水を使わざるを得ないので、繁殖した細菌で感染症にかかたりする。ひと目を避け、明け方などに草むらや道端で行なう排泄は危険である。11月19日は「世界トイレの日」。同監修『SDGsキャラクター図鑑—地球の課題がよくわかる！』（日本図書センター・2022）、バウンド著・岩附由香監修『親子で学ぶSDGs』（扶桑社・2021）、佐藤真久監修『SDGsのサイバブルークイズでわかる地球のためにできること！』（朝日新聞出版・2022）などがある。

海の豊かさを守ろう

Think the Earth 編著・ロビン西画『未来を変える目標SDGsアイデアブック』（紀伊國屋書店・2018）は、人間は太古から海の恩恵を受けながら暮らしてきたと記す。しかし、今では人間の経済活動に伴い、海の環境が大いに変わってきた。大量のゴミが捨てられ、プラスチックゴミが海を汚染し、海の生きものに悪影響を及ぼしている。海を汚すゴミを巨大なフエンスで回収し、海流や風を利用してゴミを自然に集める方法が行なわれている。このまま魚を獲りつづけると水産資源が減少する可能性が出てきた。それを防ぐために魚や牡蠣の養殖が進んでいる。上田隼也監修『みんなで調べよう・考えよう！小学生からのSDGs丸わかりBOOK』（主婦と生活社・2022）、たかまつなな著『お笑い芸人と学ぶ13歳からのSDGs』（くもん出版・2020）、保坂直紀著『海洋プラスチック—永遠のごみの行方』（KADOKAWA・2020）などを参考書籍として挙げておく。



陸の豊かさを守ろう

松葉口玲子監修『地球ときみをつなぐSDGsのお話—考える力と思いやりの心がそだつ』（学研プラス・2022）によれば、地球上の生きもの13万種類以上を調査した結果、森林の開発によって3万8000以上の種が絶滅の危機にあるという。森林の役割は水を蓄え、土砂崩れを防ぎ、二酸化炭素を吸収し、気候をよわらげ、海の生きものに栄養を運ぶ。開発によって失われる森林は、世界で年間330万haに上る。地球温暖化となり、山火事や水害が増加の一途をたどる。陸上の生態系は動物も含め密接につながっている。オオカミが減少すると、シカが増え若芽を食べてしまうので、草木を食べていた虫やネズミが減り、どんどん生きものが減少する。国内の絶滅危惧種は、ヤンバルクイナ、ライチョウ、アカウミガメ、ラッコ、ムツゴロウ、オオクワガタなどがある。植林を施し、森林を守っていくことが重要である。蟹江憲史監修『マンガでわかる！はじめてのSDGs図鑑—10才から知っておきたいSDGsの超きほん』（朝日新聞出版・2021）、笹谷秀光監修『大人が本心に答えられない！ニッポンのSDGsなぜにクイズ図鑑』（宝島社・2022）を挙げる。

気候変動に具体的な対策を

高橋真樹著『子ども気候変動アクション30—未来のためにできること』（かもがわ出版・2022）は、気候変動の対策として具体的な行動を次のように指摘する。ペットボトルよりマイボトルを使う。マイバッグ&マイ容器を使う。できるだけ包装されていないものを選ぶ。身の回りのプラスチックを減らす。洋服はみんなで使う。ものを大事にする。修理して使う。地域のものを食べる。食品ロスをへらす。ゴミ拾いをする。生ゴミをコンポストで減らす。使わない電気を消す。照明器具をLED化する。部屋を断熱構造にする。太陽光発電をつけ、使う。自然エネルギーを使う。電気自動車などCO₂の少ない乗り物を使う。動植物を育てる。

すなだゆか著『はじめての脱炭素—見て、知る、サステナブル』（小峰書店・2022）によると、人間の活動で石油、石炭、天然ガスを使い、二酸化炭素を増やしてきた。そのため、世界の二酸化炭素排出量（2019年）は367億トンとなり、地球の温暖化が進み、暴風雨や旱魃など異常気象が進んだ。フィリップ・パンティン著『きみの地球を守って』（光文社・2022）、丸山啓史著『気候変動と子どもたち—懐かしい未来をつくる大人の役割』（かもがわ出版・2022）、渡邊優著『SDGs辞典』（ミネルヴァ書房・2022）も詳しい。

最後に、グレッタ・トゥーンベリ編著『気候変動と環境危機—いま私たちにできること』（河出書房新社・2022）を掲げる。世界の学者104人が結集し、日本ではただ一人沖大幹先生が論じている。



野田 岳仁
法政大学
現代福祉学部 准教授

Takehito Noda
1981年岐阜県関市生まれ。2015年3月早稲田大学大学院人間科学研究科博士課程修了。博士(人間科学)。2019年4月より現職。専門は社会学(環境社会学・地域社会学・観光社会学)。2023年8月、著書「井戸端からはじまる地域再生—暮らしから考える防災と観光」(筑波書房)を上梓した。

「むら」の自治支える 小規模集落水道

小規模集落水道をめぐる政策的動向

本研究プロジェクトの目的は、なぜ人びとは小規模集落水道を維持し続けるのか、その理由を探ることである。

小規模集落水道とは、近代的な上水道システム(簡易水道含む)の整備されていない地域で、集落独自に小規模な戸数(給水人口100人以下)に給水する小規模水道を指す。該当する人口規模は200万人程

度と想定されている。

小規模集落水道を取りまく国の

体制整備は急ピッチで進んでいる。

高齢化や人口減少による近い将来の担い手不足が懸念されるため、小規模集落水道の代替案として、上水道システムの導入や給水車による送水が検討されている。

厚生労働省水道課は、2023年(令和5)7月に人口減少の続く過疎地への新たな配水手法として、タンク車で水を運ぶ「運搬送水」の指針をとりまとめた。運搬送水は、浄水場と配水池(給水タンク)の

おおごと



間を管路で結ばず、車両で送水する手法である。大規模なコストのかかる管路敷設工事が不要のため、人口の少ない集落への送水に適していると考えられている。

さらに厚生労働省が担っていた上水道に関連する業務は2024年（令和6）4月に国土交通省（水道整備・管理行政）と環境省（水道水質基準策定）への移管が決まった。水をめぐる行政の役割分担は各省にまたがり、複雑だった。国土交通省はこれで上下水道を一元的に所管することになり、半世紀以上続いた縦割りが見直されることになった。これらの動向は歓迎すべきものである。

けれども、上水道システムの導入や給水車による送水といった政策的対応について、地元の反応は必ずしも好ましいものではない。前号（1号）で論じたように、当該地域の人口は、人口減少や高齢化が進むからこそ、水道組合の維持管理を通じて培われてきた人間関係の断絶やむらの自治機能の低下を恐れているからだと考えられる。そこで本研究プロジェクトでは、100年近く小規模集落水道を維持する新潟県村上市大毎集落をとりあげて、小規模集落水道がむら（村落）の自治機能の安定化とどの

ようにかかわっているのかを明らかにしていく。

そのために、私たちは水道組合の性格と暮らしのしくみを解明する2つのグループを編成し、夏の調査合宿を行なった。今回はその成果からみえてきたことを論じていこう。

小規模集落水道と 社会集団の重層性

次ページ（p.38）の表のように、大毎集落には7つの小規模集落水道が存在していることがわかった。ただし、すべてが組合と呼ばれるほど組織だった管理がなされているわけではない。

水源はいずれも湧き水であり、水神の掛け軸がなくとも水神の祠があったり、水神を祀っていることは共通する。水神講は大毎水道組合のように女性だけの集まりだったようだが、中町水道組合では男女混合であった。いずれにしても、水神講は水神の掛け軸を飾って共同飲食して、歌ったり踊ったり、それは楽しみだったと懐かしむように語られた。

組合費を徴収しない水道であっても、タンクや配管の不具合が生じた場合にはその都度、費用を徴

地

域が抱える水とコミュニティにかかわる課題を、若者たちがワークショップやフィールドワークを通じて議論し、その解決策を提案する研究活動「みず・ひと・まちの未来モデル」。3年目は新潟県村上市（おほご）の大毎集落を対象としています。大毎集落には5月に訪問している学生たちにミツカンの若手社員3名が合流し、7月29日（2部の学生は7月28日）から31日の2泊3日で、調査のためのゼミ合宿を行いました。「小規模集落水道」が大毎集落というむらの自治に対してどのような役割を果たしているのか——ゼミ合宿からわかってきたことを、この研究活動のかじ取り役である野田岳仁さんに記していただきます。



染屋
「大正14年12月」の裏書きあり



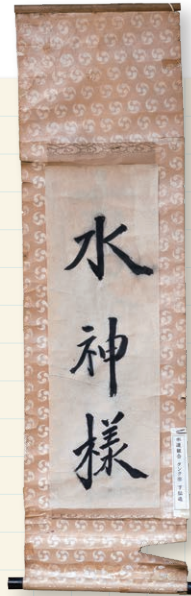
八右工門
「昭和17年3月15日」の裏書きあり



七左工門
「昭和2年5月13日」の裏書きあり



五平治
「昭和28年12月14日」の裏書きあり



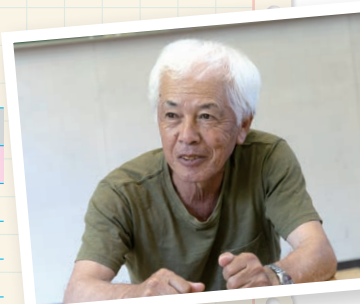
下伝造
「様」の一部が「水」となっている



丸勝屋

【表】大毎集落の7つの小規模集落水道

名称	開設時期	加入戸数	年会費	水神講	水神の掛け軸
大毎水道組合	大正13年	80戸(口数86)	2400円	昭和30年頃まで	9幅
中町水道組合	大正13年以前(最古)	9戸	なし	昭和30年頃まで	1幅
町村水道	昭和初期	15戸	1000円	平成に入る頃まで	1幅
瀬戸水道	不明	8戸	なし	なし	なし(水神の祠あり)
薬師水道	不明	8戸	なし	なし	なし
(仮)ガンネンジ水道	不明	2戸	なし	なし	なし
(仮)オジマチ水道	昭和30年頃	8戸	なし	なし	なし(水神の祠あり)



すべての掛け軸を見せてくれた大毎水道組合の組合長、佐藤均さん

取する。これらは配管の管理や修繕に充てられるもので、水の利用自体は無料である。

私たちが普段利用する上水道システムでは、水は「商品」であり、上水道は貨幣と交換する「サービス」であるが、大毎の水道はそれとは異なっている。大毎の水道は、貨幣交換できない「コモンス（共有資源）」という特徴がある。その利用と管理は組合員に限られ、排除性の働くコモンスであることが基本的性格である。

水道を離れて大毎集落をみつめてみると、じつに多様な社会集団が存在している。となり組がもつとも身近な単位であり、10戸程度のまとまりである。かつては冠婚葬祭を担い、忘年会をするものだった。月に一度は組長の家（ヤド）と呼ばれるに集まり、むらの運営や日常の悩み事を相談することもあったという。現在では、協議委員という新たな役割がつけられ、各組から基本的には男性を一人ずつ選出する（任期は2年）。協議委員がむらの執行部と組員の橋渡し役となり、総会に掛ける議案を協議する。組長は、月に3度ほど配布物を組員に配布する役割を担い、組のとりまとめを行なう。

年齢集団では、若者組（青年団）

は旧山北町全域の青年団に統合され（山北の民俗4）、集落の青年団は解散したが、子供組（子供会、年寄組（老人会）は健在である。近年では中老組にあたる世代の集団が一部の有志でつくられている。婦人会は解散しているが、女性の親睦のグループは複数ある。なかでも嫁入りした人たちのだけのグループがあり、知り合いの少なかった時代にはとても助けられたと語る人が少なくなかった。また、男女を問わず気の合う仲間たちとの親睦会が複数あるようだ。

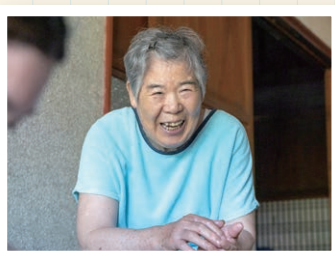
これらに加えて、集落には7つの水道が存在している。さらに戸数最大の大毎水道組合は9つの組にわけられている。

このように、人びとは複数のつながりを持っているのである。7つの小規模集落水道や暮らしかかわる社会集団の重層性が大毎集落の人びとのつながりの豊かさを支えていることになるのだろうか。

となり組の再編と
平準化の論理

この重層性の意味を考えるうえ

聞き取りに協力してくれた渡辺弘子さん。12月限定の組長の仕事、大毎の女性グループのことなどを語った





中町水道組合の組合長を務める佐藤憲一さん。かつて行なっていた水神講の話やとなり組の再編などを語る

佐藤憲一さんが保管する中町水道組合の水神の掛け軸



■大毎水道組合(9組)の「水神様」掛け軸

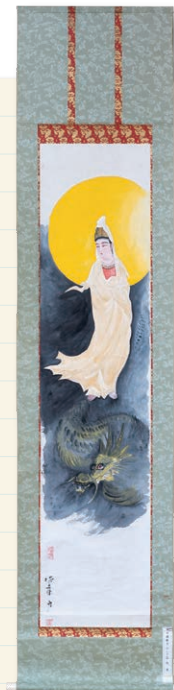
今は佐藤均組合長が保管。それぞれの名称は代表者の屋号



太治右工門
傷みが激しいため、畳の上に置いて撮影



九郎治(くろうじ)
昭和44年に住民の「豊さん」が描いたもの



丸良
新たに描き起こしたので絵柄が異なる。住民で組合員の佐藤功さんが描いた

と、水道組合の組を重視して再編したといえるわけではなさそうであった。そうであるならば、人びとが意識をしないほどに、水道組合のつながりが溶け込んで

増え、10戸を下回る組がでてきたためである。

地図を広げて再編前と後のとなり組の構成をみると気になったことがある。再編前のもとなり組には大毎水道組合の組のまとまりは考慮されていなかった。それが再編後になると大毎水道組合の9つの組の構成員が再編前よりもまとまっているようにみえたからだ。しかし、聞きとりを重ねていく

で見逃せないのが、となり組の再編である。大毎集落では、2010年(平成22)に17組あったとなり組を12組に再編している。その理由は、居住者の減少によつて空き家が



瀬戸水道に加入しているという五十嵐甲(きのえ)さん。給水タンクの場所や配水について教えてくれた

というのも大毎水道組合では、かつて20戸に増えた組を2つにわけて、ひと組あたり10戸にしていたからである。そのためにならわがわが住民が水神の掛け軸を新た

でいる可能性も否定できない。けれども、これについては答えをだせる段階ではない。追加調査が必要である。ここでは、となり組はなぜ10戸を下回ってはいかないのかを考えていこう。じつは、大毎集落のとなり組の組長の任期は一ヶ月である。全国的にみれば、一年の任期とする地域が多いであろう。にもかかわらず、大毎では、毎月組長が交代するのである。そうすると、10戸を下回ってしまう。年間2回組長を務める家が複数でてくる。それは望ましいことではなく、組の再編を求める声が高まったのである。

に描いているのだ。これはいったいどういふことなのだろう。

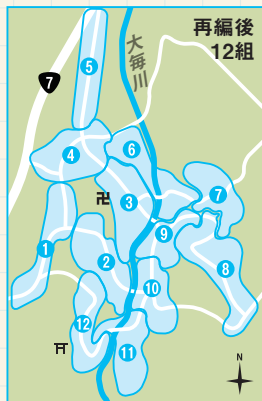
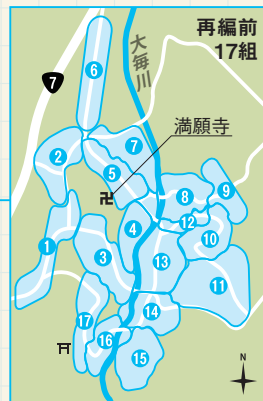
このような疑問を抱くのは、現在の地域政策の方向性とは真逆の対応をみせているからだ。

73号(詳細は神奈川県真鶴編第3回を参照のこと)でも述べたように、現在の地域政策は、人口減少や高齢化による担い手不足を考慮して、地域組織を合理化・広域化させる傾向にある。つまり、小さなまとまりをより大きなまとまりへ集約しようとしているのだ。地域組織も農地も水道もこの流れにある。



お話を聞きした加藤キヨコさん(右から2人目)を囲むゼミ生とミツカン若手社員

■ 大毎集落のとなり組の再編



となり組の再編について当時の経緯や配慮を語る加藤良成(よしなり)さん。再編にあたっては良成さんが考えた案が採用された

けれども、大毎集落の社会集団は小さくまとまることにこだわっているようにみえる。

疑問はそれだけではない。となり組の組長はなぜ一ヶ月で交代させるのかということである。

むらのしくみをつぶさに調べていくと、集落運営の基本原則とも呼べるような性格と無関係ではないことがみえてきた。

そのことが象徴的にあらわれている事例をひとつだけあげておこう。

大毎集落は自治会費を細かく階級にわけて徴収していた(注)。記録に残っているだけで、201



1年度(平成23)に4階級から2階級(免除があるため、実際には3階級)にしている。1級と2級では3倍近い開きがある。これは各戸の世帯構成や経済状況にあわせて設定されるものである。各戸に「平等」に一定額を求める平等割よりも、各戸の実情を汲み入れた「公平性」を重視した制度といえる。これは見立割とも呼ばれている。

つまり、各家の権利と義務(負担)が公平になるように工夫されているのである。

さて、ここまでみてくると、問題はこの平準化の論理と水道組合がどのように結びついているのかということである。大毎水道をめぐる動きを確認していこう。

小規模集落水道と「むら」の秩序

ながっていることだ。住民は、毎年一回は必ず組長を経験する。そうなる、必然的にむらの運営に無関心ではいられなくなる。使い古された言葉で似つかわしくないが、これが住民の「主体性」をひきだすしくみにもなっているように感じられるのである。



吉祥清水で水分補給

(注)自治会費の階級

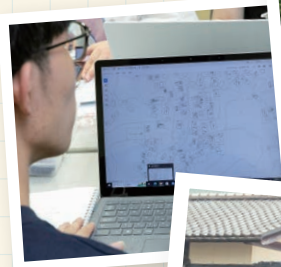
かつては40階級ほどあったという人や5から7階級という人などさまざまではっきりしない。『山北の民俗4』によると6km離れた中継集落では1988年(昭和63)時点で13階級あったという。さほど遠くない数字であろう。

1978年（昭和53）には、旧山北町から簡易水道の水源に大毎水道組合（以下、大毎水道）の水源を充てたいという打診があったが、それを断っている。1993年（平成5）には、「魅力ある集落づくり事業」によって、大毎水道の水を供給した水汲み場「吉祥清水」が整備され、環境省による「平成の名水百選」にも選ばれた。

そして、昨年度の集落の総会では大毎水道の水源地の所有権を購入することを決議している。

大毎水道は、利用と管理のしくみからわかる通り、組合員だけが利用できる排他性の働くコモンズであった。しかし、平成に入ってから水汲み場を整備して、水を不特定多数に開放したり（年間の利用者約2万人）、集落として水源地を購入するなど、大毎水道はむら全体「コモンズ」となる方向へより質的に変化させている。このような動きもじつは、平準化の論理と無関係ではない。

調査を進めて意外だったのは、大毎水道以外の水道の水源はそれほど安定しているわけではないことである。水道組合の規模が小さくなれ



ばなるほど、不安定である。それゆえ、大毎水道の豊かさを羨む声はあちこちで聞かれた。

町村水道でさえ、もともとの水源（いまの瀬戸水道の水源）では水量が乏しかったため、新たな水源を探し当て、さらに農業用水の水源の一部を加えて安定化を図っているのだ。

このような状況にあり、大毎集落はたしかに水が豊かな地域であるものの、その内実を丁寧

にみていくと、集落内で水をめぐり格差がないわけでもなかった。

だからこそ近年の動きをみると、大毎水道をむらの「みんなのもの」にすることによって、この格差を是正しようと試みているように考えられるのである。すなわち、大毎水道のコモンズ化とは、各家の権利と義務（負担）が公平になるように調整する平準化の論理と密接に結びついたものである。

このような状況にあり、大毎集落はたしかに水が豊かな地域であるものの、その内実を丁寧

にみていくと、集落内で水をめぐり格差がないわけでもなかった。

謎解きのような研究活動（編集部）

2023年度の研究対象地域が大毎集落に決まるとさまざまな文献に目を通し、5月には現地を訪問する。しかしテーマは難解だ。会うべき人、聞くべきことは無尽蔵にある。夏合宿の初日から（数人は前日から）学生たちとミツカン若手社員は精力的に動いたものの、夜の討議では調査が不十分であることを野田さんから指摘された。

しかし、2日目になると調査はスピードアップする。水道チームと生活チームが情報を共有しながら、新たな人に会いに行き、一度会った人でも聞くべきことがあれば臆せず会いに行く。日数が限られているのに、調べること、わからないことは数多。その危機感が「迷っている暇はない」とみんなを後押ししているように見えた。

水道組合を一つひとつ調べていくと、事前情報と実態が異なることがわかってきた。そして、となり組をはじめとする重層的な集落構造が徐々に明らかになってきた。そばで見えて、まるで謎解きのようなだった。

大毎集落の夏は暑かったが、汗だくになりながら聞き取りに回る学生たちとミツカンの若手社員も熱かった。これから研究をどうまとめるのか、期待したい。

このように、小規模集落水道の運営には、むらの秩序を支える平準化の論理が貫かれている。これは上水道システムでは決して代替することができないものだ。事実、大毎集落には1978年（昭和53）に簡易水道が導入されているにもかかわらず、人びとの利用は極めて限定的で、小規模集落水道の利用に強くこだわってきたからだ。

そうだとするならば、仮に小規模集落水道を廃止したり、上水道システムに移行することになれば、むらの秩序の切り崩しに直結するだろう。

大毎集落の人びとが小規模集落水道を維持し続ける理由は、水道組合がこのようにむらの秩序の維持と不可分な存在だからではないだろうか。

（2023年7月29日取材）

大毎水道組合の水源地を集落として購入した経緯を語る大毎集落総代（区長）の佐藤栄作さん



栄養価の高い
乳酸発酵食品

ふなずし

水と風土が織りなす食文化の今を訪ねる「食の風土記」。今回は古くから琵琶湖地域の名産品として知られる「ふなずし」です。



唯一の正解がない
多様性の醍醐味

「ふなずし」は、魚を塩と米などのデンプンで乳酸発酵させた「なれずし」の一種で、近江(琵琶湖地域)の伝統食だ。酸味とクセのある香りが酒肴などにぴったりで、好きな人にはたまらない。

春の産卵期に獲った主に「ニゴロブナ」の鰓・鱗・内臓を取り除き、一尾丸ごと3カ月ほど塩漬(地元では「塩切り」と言う)したのち、8月半ばから4〜6カ月間、白米と交互に重ねて漬け込み自然発酵させる。

これが一般的な製法だ。「しかし……」と滋賀県立琵琶湖博物館専門学芸員の橋本道範さんは言う。

「いま現実にはふなずしのつくり方はとても多様です。家庭、地域、店舗によつて、さまざまな工夫が重ねられ、これという正解はありません。飯漬期間一つとっても、3カ月で食べるところもあれば、3年のところもあります。塩切りしたフナを洗って乾かすのが何日か、といった些細な点から、飯漬けのとき手水として焼酎を使う場合もあるなど、こだわりが多彩なのです。それが微妙な味の違いに現れています。こうした多様性こそ、ふなずしの醍醐味といえるでしょう」

ふなずしは平安時代から琵琶湖地域の名産品だったが、江戸時代の1689年(元禄2)のレシピ本「合類日用

フナをご飯と一緒に発酵させた「ふなずし」

ふなずしのつくり方



- 産卵期の春に獲った25cm程度のニゴロブナの鱗、鰓、内臓を取り除き、血抜きし、3カ月ほど塩漬け。この工程をしっかりやらないと匂いが強くなってしまふ塩漬けたニゴロブナを取り出し、水で洗って塩分を抜く
- 卵をもったメスなので、腹は強く押さえないように注意しながら洗う。鱗が残っていないか道具も使いながら確認
- 水洗いしたらかごに入れて一昼夜干す
- 干し終えたフナを一尾ずつ取り出し、鰓ぶたからご飯を詰めていく。ご飯は多めにした方が発酵はより進む
- 樽にビニールを敷いてご飯を入れ、フナの頭が外側を向くように並べる
- 隙間なくしっかりご飯を詰める。最後は表面をご飯で覆って蓋をする。8月半ばから4~6カ月ほどこのまま発酵させる



「寒ブナを漁獲して冬に漬けるというのも驚きですが、塩切りせずダイレクトに米で漬ける、というのもふなずしづくりのプロに聞くと『そんな漬け方はない』とのことでした」と橋本さんは言う。

橋本さんの研究チームは、2020年(令和2)から、この「古ふなずし」の再現実験を4回重ねてきた。玄米の風味が移り、ジャーキーのような食感の硬くて香ばしいふなずしになったという。古ふなずしはやがて廃れ、江戸後期から今に近いふなずしが普及するが、これもまた試行錯誤を繰り返したふなずしの歴史的な多様性の一つといえるかもしれない。

「単なる保存食では残らなかったはず。日常食であると同時に祭事や寄り合いでの儀礼食でもあります。各家庭で持ち寄り、お持たせにもして、コミュニケーションに

欠かせない食文化。それが地域性を生んだと思います」

ふなずし以外にも琵琶湖地域には淡水魚のなれずしが17種類もあり、すべて今に続いているという。こんな地域は滋賀県だけだ。

次世代に伝えていける新しい形を求めて

とはいえ、ふなずしをつくる家庭は減り、その味をまったく体験したことのない世代も増えている。大津市石山寺山門前に店を構える「至誠庵」では、ふなずしとともに「ふなずしパイ」や「ふなずしクッキー」を製造販売している。「捨てられることが多い飯の部分で何かできないかと、20年前に母が考案しました。パイ生地の上に飯を敷き、チーズを乗せて焼き上げます」と話すのは取締役の井上貫太さんだ。

風邪をひいたらふなずしを食べろ。そんな言い伝えがある。栄養価の高い乳酸発酵食品であること

に手軽にふなずしの味を楽しんでいただきたい」と井上さんが言うように、今も続いている試みだ。料理を引き立てる調味料として飯を使う、といった提案もしていきたいという。

橋本さんも「もともとの多様性を軸にしたふなずしの文化を若い人たちが継承し、時代に沿ったまったく新しい形のふなずしが出てきてほしい」と話している。

チーズと同じ乳酸発酵食品なのでワインとのマリナージュもよい。「洋食に合うふなずし」も次代への新しい在り方の一つだろう。

[取材協力]至誠庵
滋賀県大津市石山寺3-2-37 Tel.077-534-9191
志じみ釜めし湖舟内(不定休)



- 1至誠庵のある大津市は琵琶湖のなかでも対岸が近く、南湖(なんこ)と呼ばれるエリア
- 2滋賀県立琵琶湖博物館専門学芸員の橋本道範さん。江戸時代の製法をなぞった「古(こ)ふなずし」づくりに取り組む
- 3有限会社至誠庵取締役の井上貫太さん。ニゴロブナの鰓や鱗、内臓を取り除く作業は子どもの頃から手伝っていた
- 4石山寺山門前に店を構える至誠庵。自家製ふなずし、湖魚佃煮を製造・販売している

坂本クンと行く川巡り 第24回 Go! Go! 109水系



川系男子 坂本貴啓さんの案内で、編集部の方々を全国の一級河川「109水系」を巡り、川と人とのかわりを探りながら、川の個性を再発見していく連載。今回は八女茶の産地や水郷柳川を擁する矢部川です。

坂本 貴啓

さかもと たかあき

金沢大学 人間社会研究域地域創造学系 講師

1987年福岡県生まれの川系男子。北九州で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味をもちはじめ、川に青春を捧げる。全国の河川市民団体に関する研究や川を活かしたまちづくりの調査研究活動を行なっている。筑波大学大学院システム情報工学研究科修了。白川直樹研究室「川と人」ゼミ出身。博士（工学）。国立研究開発法人土木研究所自然共生研究センター専門研究員、東京大学地域未来社会連携研究機構北陸サテライト特任助教を経て2023年10月より現職。

109水系

1964年（昭和39）に制定された新河川法では、分水界や大河川の本流と支流で行政管轄を分けるのではなく、中小河川までまとめて治水と利水を統合した水系として一貫管理する方針が打ち出された。その内、「国土保全上又は国民経済上特に重要な水系で政令で指定したもの」（河川法第4条第1項）を一級水系と定め、全国で109の水系が指定されている。

川名の由来【矢部川】

八女郡が上妻郡、下妻郡と分かれた時代に八女が訛って矢部と称して残ったとされる。

一級河川

やべ川
YABE RIVER



国土交通省



矢部川の秋水廻る水の郷

貴啓

やわらかくて
安らぐ風景

「馬鈴薯の花さくころ、街の小舟
はまた幾つとなく矢部川の流れを
溯り初める。さうして甘酸ゆい燐

光の息するたびに、あをあをと眼
に沁みる螢籠に美くしい假寝の夢
を時たまに閃めかしながら水のま
にまに夜をこめて流れ下るのを習
慣とするのである。」

なんと美しい情景でしょうか。

矢部川

水廻り廻らす毛細水脈

柳川出身の作家、北原白秋は作品の一節で矢部川の情景をこのように表現しています（『思ひ出―抒情小曲集』）。そのとおり矢部川にはやわらかい情景があります。

初めて訪れたときの印象も、上流域の茶畑、中流域の農村水路、下流域の水郷柳川の運河など、どれも安らぎを与えてくれる風景でした。それには矢部川の自然の営みがつくり出した地形や気候風土のみならず、人がつくり出した社会の事情があったのです。今回、改めて矢部川流域を巡り、個々の情景が生まれた理由を探してみました。

矢部川の気候風土が育てた八女茶

矢部川を遡っていくと、八女市に入ります。川から少し離れたところに緑の丘陵地が見えてきます。川から離れて丘陵地を上ってみました。見渡す限りの茶畑です。八女市は八女茶というブランドが確立されたお茶の一大産地です。実は川も茶畑風景と関係があります。お茶の風景がどのように生まれたか、八女市役所農業振興課の谷口博信さん、深野晃弘さんにお話をうかがいました。

「八女はお茶の発祥の地です。室

町時代に中国（明）から持ち帰った茶の種を、榮林周瑞禪師が庄屋の松尾太郎五郎久家に栽培・製茶の技法とともに伝授したのが発祥と言われています。八女茶は少し甘めの味が特徴です」

お茶がなぜこの地で栽培されたか、八女茶の甘味が出るのには理由があると言います。

「川霧です。八女の盆地は朝夕に川霧が発生します。川からの水蒸気がお茶の天敵である霜を防止しながら寒暖を繰り返すことで甘みが増します」

この気候風土が八女茶を生み出しました。茶は新芽から摘み取りまで日光に当てつづけた「煎茶」と摘み取り3週間前から日光を遮って育てた「玉露」があるそうですが、なかでも八女伝統本玉露は日光の遮断に稲わらを用いるなど厳しい条件をクリアしたものがブランドとなります。全国茶品評会にも出展される八女のお茶は、川霧の気候風土と伝統製法が合わさって生み出されています。

現代につながる「土木の神様」の国づくり

水都として知られる柳川は、実は矢部川の支流、沖端川の水路網で成り立っています。

廻水路の一つである「黒木堰」から見た矢部川。水を分け合いながら流れていく

街のあらゆるところに水路網が張り巡らされており、運河の舟巡りで有名な水郷柳川の風景が広がっています。北原白秋もこの水風景で育ちました。

この風景はどのようにして生まれたのでしょうか？柳川古文書館学芸員の白石直樹さんにお話を聞きました。

「1601年（慶長6）に田中吉政が柳河城に入城した際、城下町の基礎を築きました。吉政は柳河城の周囲に水路網を築きましたが、これが今の掘割のもとになりました。のちに、北原白秋はこの風景を『水郷』と表現して文学で発表したのが、水郷柳川と呼ばれるようになったゆえんです」

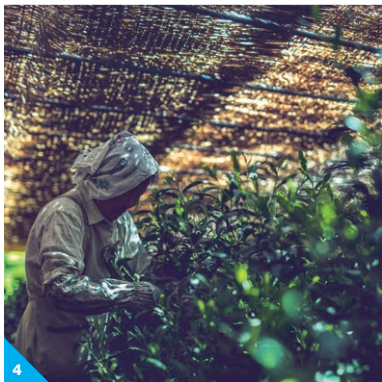
その後、吉政は水路網だけでなく、柳川と八女を結ぶ街道、有明海沿岸32kmにも及ぶ潮止め堤防「いちいちょう慶長本土居」を築きました。柳河城を起点とした都市計画が田中吉政時代に確立され、現代の基盤になっています。

白石さんはこの水路の重要性を防災の角度から語ります。

「柳川の周りには、クリークと呼ばれる農業水路網が張り巡らされています。低平地は水捌けがわるく内水被害が出やすいですが、ク



八女茶



1 八女茶について教えてくれた八女市農業振興課の谷口博信さん(右)と深野晃弘さん(左) 2 高台から見た八女市の茶畑 3 稲わらで編んだ「こも」で被覆した茶畑 4 八女伝統本玉露の茶摘み風景 3, 4 提供: 八女市建設経済部農業振興課



田中吉政

矢部川		
水系番号	: 93	
都道府県	: 福岡県 熊本県	
源流	: 三国山 (994 m)	
河口	: 有明海	
本川流路延長	: 61 km	83位 / 109
支川数	: 23 河川	98位 / 109
流域面積	: 647 km ²	84位 / 109
流域耕地面積率	: 24.1 %	10位 / 109
流域年平均降水量	: 2450.4 mm	26位 / 109
基本高水流量	: 3500 m ³ /s	81位 / 109
河口換算の基本高水流量*	: 4923 m ³ /s	78位 / 109
流域内人口	: 16万 6123人	57位 / 109
流域人口密度	: 257人 / km ²	35位 / 109

(基本高水流量観測地点: 船小屋(河口から15.3km地点))
 ※河口換算の基本高水流量 = 流域面積×比流量(基本高水流量÷基準点の集水面積)
 ※各水系の比較のため公式発表諸元をもとに坂本貴啓さん作成
 データ出典「河川便覧 2002」(国際建設技術協会発行の日本河川図の裏面) 流域内人口 = 国土交通省「一級水系における流域等の面積、総人口、一般資産額等について(流域)」を参照(最終閲覧日2013年4月)

【矢部川流域の地図】
 国土交通省国土数値情報「河川データ(平成19年)、流域界データ(昭和52年)、行政区域(令和4)、鉄道データ(令和4年)、高速道路時系列データ(令和4年)」より編集部で作図

5 水郷柳川の基盤をつくった田中吉政の肖像 眞勝寺蔵/写真提供: 柳川古文書館
 6 柳川の歴史や田中吉政の功績について語る 柳川古文書館主査幹(学芸員)の白石直樹さん



流に自領の堰を設けて取水した水を、相手の堰を迂回して川に落水させ、さらにその下流にある自領の堰へ水を安定的に回すための水路です。

廻水路の図を見ると、立花領にも有馬領にも支川があります。自領の支川が矢部川に流れ出ると、相手が堰で取水する前に、自領の支川直下に設けた堰から廻水路で取水しています。

ただし、廻水路にかかわる最上流部の有馬領の花巡堰から上流の集水域は、立花領と有馬領に跨っています。そこで、花巡堰の右岸側に越流部を設け、河川水の一部が立花領の用水として越水するようにもしています。

今も矢部川では、濁水になると廻水路が機能を発揮し、左右岸それぞれの田畑に自領の水を届けています。

張り巡らされた掘割から広がる活動

北原白秋によって水郷と呼ばれるようになった柳川ですが、一時はヘド口にまみれた悪臭漂う水路になっていたときもありました。掘割の水を守る活動を今日まで多くの市民が行なってきました。

水郷を白秋の時代の水景に戻そ

うと活動するのが「水の会」です。1991年（平成3）8月1日（水の日に発足しました（水の会の詳細は、水の文化32号参照）。もう30年以上続く水の会ですが、どのような活動を行なってきたのか、山口徳雄さん、平野幸二さん、平田健造さんにお話を聞きました。

「発足当初は、水質悪化がひどく柳川の掘割を埋めてしまおうという議論もありましたが、水の会発足者の故・広松伝さんの尽力により、掘割の水質再生も進み、この水郷の風景は守られました」

その後、柳川だけでなく上下流の交流を通じて矢部川流域の水景を守っていくと、2005年（平成17）に「矢部川をつなぐ会」も発足して流域を視野に入れた活動も行なわれています。

柳川では生き物をテーマにした子どもたちの活動も盛んです。柳川の近くに広がる有明海は干満の差があり干潟特有の魚も多くいるため、魚を見せようと近藤潤三さんが水産用冷凍庫跡を改装して私営の「おきのはた水族館」を立ち上げます。その後NPO法人SPERA森里海・時代を拓くが「やながわ有明海水族館」と改名し管理運営を行なっています。代表の内山里海さんにお話を聞きました。

「学生館長を置くこともこだわりの一つです。2016年（平成28）から高校生が館長になり、すでに三代目です。子どもたちが水族館の運営に携わることで、若者らしい発想で、多くの人に魅力を発信する水族館になってほしいと思っています」

張り巡らされた掘割の水脈は、一人ひとりが水への関心呼び起こすきっかけになっていることがうかがい知れました。

利水者との協力で「先行排水」を実施

矢部川の下流、海拔0m地帯の低平地にクリークが張り巡らされています。特徴は、干拓により張り巡らされた水路網で形成された農業地帯、河口の有明海に広がる干潟漁業（ノリ養殖、アサリ漁など）です。低平地なので大雨が降ると水はげが悪く、洪水が広がりやすい面も持ち合わせています。低平地の水の利用、治水において近年さまざまな取り組みがなされてきました。国土交通省九州地方整備局筑後川河川事務所矢部川出張所の橋口忍さんにお話を聞きました。

「矢部川はさまざまところに水を張り巡らせています。分派する沖端川を通じて夏場は柳川の掘割



9 「水の会」の活動について語る山口徳雄さん(左)、平野幸二さん(中)、平田健造さん(右) 10 「水郷」の名にふさわしい柳川の風景。人びとの活動が掘割を守った 11 やながわ有明海水族館学生館長の亀井裕介さん 12 やながわ有明海水族館を運営するNPO法人SPERA森里海・時代を拓くの内山里海さん 13 やながわ有明海水族館の外観。入りやすい雰囲気 14 掘割を清掃するNPO法人SPERA森里海・時代を拓くのメンバーたち 11, 14 提供:NPO法人SPERA森里海・時代を拓く





南校区

飯江川

矢部川



長嶋・海津

飯江川



15

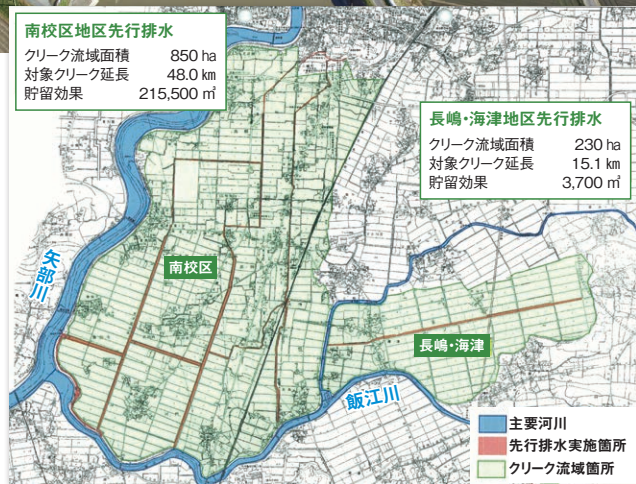
15 国土交通省が堰を操作し、地域と連携して先行排水を実施している「長嶋・海津地区(みやま市)」16 矢部川下流域の内水氾濫を抑えるため、事前に水路の水を抜くなど先行排水を行なっているエリア(南校区はみやま市が実施) 15,16 提供:国土交通省九州地方整備局筑後川河川事務所 17 矢部川の「先行排水」などを説明してくれた国土交通省九州地方整備局筑後川河川事務所の皆さん。矢部川出張所所長の橋口忍さん(中)、調査課企画係長の梶原徹さん(右)、調査課企画係の楠原美沙さん(左)

低平地



土木×PICFAアート

九州地方整備局筑後川河川事務所と佐賀県の障害福祉サービス事業所のPICFA(ピクファ)のコラボレーション「土木×アート」から生まれた作品群(ショベルカー、スコップ、ヘルメット) 提供:国土交通省九州地方整備局筑後川河川事務所



矢部川下流域の先行排水実施エリア 提供:みやま市

の水が足りなくならないように気を配り、冬場は有明海で盛期を迎えるノリ養殖のために水を流したりと微妙な調整のもと水利用が行なわれています」
水が限られているゆえ複雑な水利用がなされる反面、洪水時には低平地の水をいかに排出するかに取り組んでいるそうです。
「近年は雨の降り方も変わり、矢部川も水害に見舞われる年がありました(2012年決壊)。内水被害を少しでも抑えようと、利水者に協力してもらい、事前にクリークの

水位を下げたおき、洪水の流れ込む余地をつくる『先行排水』を実施しています。これは矢部川の流域治水としての取り組みです」
水が欲しい時は流し、多すぎる時は排除する。そのコントロールは難しいです。河川管理者だけでは難しい複合的な水管理を、地域と協力しながら治水、利水の両面から独自に試行しています。まさに「矢部川流」ともいえるのではないのでしょうか。
人が張り巡らせた流域の毛細水脈

水利用の複雑な矢部川ですが、のぞき込むと川遊びしやすいような水量が流れています。本来ならもっと多いであろう矢部川の水ですが、川から派生して、流域各所に行き届いているその様は、まさに「毛細水脈」と呼ぶにふさわしい風景です。

田中吉政時代に基礎を築いた水郷柳川の都市計画、両岸に廻水路で水を分け合った歴史、有明海の干拓の変遷が、水脈として歴史を刻んでいったともみてもれます。人が張り巡らせた毛細水脈の筋の一つひとつに、矢部川流域の暮らしの息遣いを感じました。

※文中の方々の所属や肩書きは取材当時のもの (編集部)

(2022年11月9・11日取材)



イベント



ミツカンの水づくり ～三木工場・ビオトープ～ オリエンテーション&ワークショップ実施



三木工場・ビオトープで実施したワークショップの様子。円内は講師をお願いした水ジャーナリストの橋本淳司さん

2023年6月、ミツカングループ社員向けの企画として「ミツカンの水づくり～三木工場・ビオトープ～」を実施しました。昨年に引き続き、水ジャーナリストの橋本淳司さんにご協力いただき、オリエンテーション(6月6日)とビオトープを併設する三木工場でのワークショップ(6月13日)を行ないました。

オリエンテーションでは、現三木工場長が「三木工場の水使用量、水循環システムの仕組み」を、三木工場設立に携わったミツカンのOBが「当時の背景やコンセプト」を説明。そして、橋本さんからは「現代社会における生産拠点(工場)での水事情」をお話いただきました。

ワークショップでは、オリエンテーションでの内容を踏まえ、

実際に三木工場の利排水設備やビオトープを見学。また、三木工場の排水を使用している地域関係者の方々から水の重要性や三木工場の取り組みへの思いなどを伺い、さまざまな部門の社員がチームごとに討議し、明日からできる「未来アクション紙芝居」の作成・発表を行ないました。

自社の水への取り組み、地域との関係性などを知り、これから自分たちにできることを考える貴重な機会となりました。

今後も、社員が自社の事業活動における「水」の重要性を認識し、「水」に関する興味関心を深め、視野を広げる企画を継続していくことで、「人と社会と地球の健康」の実現に貢献してまいります。

会議



「アドバイザー会議」を実施

ミツカン東京ヘッドオフィスで開催したアドバイザー会議

2023年9月、当センターのアドバイザーである沖大幹さん、陣内秀信さん、鳥越皓之さんとセンタースタッフが一堂に会してアドバイザー会議を実施しました。

本年度前半の活動内容、そして社外のステークホルダーに聞き取りを行なった活動の評価を報告。さらに2024年度の活動計画案をお伝えし、意見交換を行ないました。

アドバイザーの方々から客観的かつ長期的な視点からいただいた数々のご意見をもとに、2024年度以降もセンター活動を推進してまいります。

調査

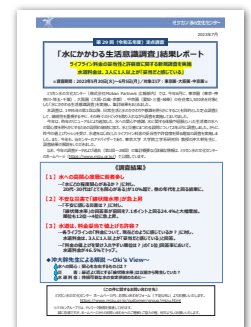
第29回「水にかかわる生活意識調査」 結果レポート公開

1995年に調査を開始した「水にかかわる生活意識調査」は、日常生活と水のかかわりや意識を明らかにすることを目的とした定点調査です。29回目となる2023年度は、20代～60代の1500名を対象に実施し、7月にHPで結果レポートを公開しました。

昨今の値上げラッシュのなか、水道や電気などのライフライン料金について生活者はどのように感じているのでしょうか。

今回は、このような状況下だからこそ新たな試みとして、これらの料金の妥当性や許容度を探る趣旨の設問を追加しました。また、結果レポートのなかから、不安な災害で「線状降水帯」が急上昇したことを取り上げ、リリースを発信。これをきっかけに「社会変化と水インフラ研究会」にお声がけいただき、勉強会に参加しました。

来年度は、第30回という節目を迎えますので、アドバイザー会議や勉強会での学びを活かし、より有益な調査となるよう検討を重ねてまいります。



琵琶湖関連の書籍をプレゼント!



- ①『忍びの滋賀—いつも京都の日陰で』(姫野カオルコさんの著書)
 ②『琵琶湖—水辺の文化的景観』(金田章裕さんの著書)
 ③『おいしい琵琶湖八珍—文化としての湖魚食』(滋賀県ミュージアム活性化推進委員会編)
 ④『RICE IS COMEDY—人口4000人のまちで仕掛ける「地域の生存戦略」』(ONESLASHの著書)

今号の制作にご協力いただいた皆さまの書籍のなかから、琵琶湖や滋賀県を深く知ることができる書籍を抽選で4名の読者に差し上げます。右の「75号アンケート」にWebから回答のうえご応募ください。なお、応募期限は2023年11月30日(木)とさせていただきます。

皆さまからの感想、
情報をお待ちしています!

『水の文化』75号のアンケートにご協力ください。機関誌『水の文化』をより充実したものにするため参考とさせていただきます。

回答はこちらから



<https://forms.office.com/r/pX5hTjduhX>

アンケート用紙をお持ちの方は
下記へご返信ください。

FAX: 03 (6784) 3056

編集後記

琵琶湖を実際に訪れ取材を重ねるにつれて、その器の大きさに魅了された。日本一の面積が、生まれ育った知多半島がすっぽり収まり、東京23区よりも広いことも驚くことながら、関わる全ての人を包み込み、自分勝手な振る舞いにも理解を示し、周りからの絶大な信頼を得ている姿に、憧れに似た大人の余裕を感じたのだと思う。(五)

長い歴史の中で、環境も社会も人の価値観も変化する中、「何をし、何をしない方が良かったのか」を記録することが、後世の大きな財産になると伺い、「水と人」との関係を追いつつ続けてきた琵琶湖研究の深奥を感じました。そして同じく奥深い「ふなずし」の世界。食べ比べ目的で、滋賀県を訪問したいと思います。(松)

滋賀県というと彦根城を思い出します。桜の季節に訪れた彦根城は薄曇りの中、満開の桜と天守が素晴らしい風景をつくり出していました。堀周辺も散歩したのですが、あの堀の水もすべて琵琶湖から引いているのかと今さらながらに気づきました。彦根城の堀は三重だったそうなので、次は外堀の痕跡探しに行きたいです。(飯)

「東京は山がないから、どこにいるかわからん」。山の多い土地で育った友人が言っていた。琵琶湖のそばで生きる人々も、湖水と山々がかたちづくる風景で自分の立ち位置をつかんでいるのだろう。自分にとっての座標の「0」についての話は、その人の言葉が聞けることが多いように思う。そんな取材は楽しい。(秋)

最終回を迎えた「水の文化書誌」。古賀さんから撮影用に書籍をお送りいただくやり取りを、水の文化26号から続けてきました。その荷物の中には必ず、棒ラーメン、お茶、お菓子など福岡にちなんだお土産が。同郷の家族が常に楽しみにしていました。今後は書籍のやり取りはありませんが、いつもの羊羹はこれからもお送りしたいと思います。(力)

大津で地元の人しかいない食堂に入って昼定食を頼んだ。唐揚げを頼張りつつ学習船「うみのこ」について聞くと「乗りました!」と若い店員さんが声を弾ませ、常連さんたちは「俺も乗った」「二年違いで乗れなかった」と言い、厨房のおかみさんは「乗った乗らんで年齢がわかるから困るんよ」と笑う。なんだか幸せな昼下がりがだった。(前)

ミツカン水の文化センター機関誌
水の文化 第75号

ホームページアドレス

<https://www.mizkan.gr.jp/>

発行日

2023年(令和5年)10月 初版1刷

企画協力 (氏名50音順)

沖 大幹 東京大学大学院工学系研究科教授
陣内秀信 法政大学名誉教授
鳥越皓之 大手前大学教授

制作

浦本五郎
松本裕佳
小林夕夏
久保悦史
飯野真奈実

編集製作

前川太一郎 編集
秋山健一郎 編集
中野公力 デザイン・撮影
蔵田 豊 デザイン

執筆

秋山健一郎 (pp.18-21, pp.28-29)
上原 純 (pp.16-17, pp.22-23)
佐々木 聖 (pp.6-7, pp.10-11, pp.24-25, pp.42-43)
前川太一郎 (pp.8-9, pp.12-15)
若井 憲 (pp.26-27)

撮影

川本聖哉
藤牧徹也
渡邊まり子

印刷

中笠総合印刷株式会社

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中笠ビル
株式会社 Mizkan Partners
Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578



ミツカン水の文化センター



表紙:最北端の葛籠尾崎(つづらおざき)から琵琶湖を望む。古来、人びとは琵琶湖とともに生きてきた
撮影:川本聖哉

(上)朝焼けに染まる琵琶湖。時刻や天候によってさまざまな表情を見せる
撮影:藤牧徹也
(下)現代風に湖魚料理をアレンジし、おいしさを伝えつつ漁業を守ろうとするBIWAKO DAUGHTERS
撮影:渡邊まり子

